八千代町埋蔵文化財調査報告書 14

茨城県結城郡八千代町大字菅谷

権現山遺跡

－集合住宅建設に伴う遺跡の発掘調査－

2011

八千代町教育委員会

序　　文

平成２１年２月に、集合住宅建設に伴い権現山遺跡の発掘調査を実施しました。権現山遺跡は、昔から縄文土器が多く出土する遺跡として知られており、発掘調査に先立つ試掘確認調査でも、完形品に近い縄文土器が出土し、発掘調査への期待が膨らみました。

発掘調査は約２００㎡の範囲で、縄文時代のものは竪穴住居跡が１軒発見されましたが、これは町内では初めてのことでした。一方で、意外な発見もありました。当初全く予想していなかった中世の地下室が３基も発見されたことです。これもまた町内では初めての発見で、県西地方でも鬼怒川以西では、まだ４、５か所の遺跡でしか調査例がありませんので、今後の歴史研究に貴重な資料を提供できることをうれしく思います。

発掘調査から報告書作成までご協力いただきました関係者のみなさまに心から感謝申し上げ、本報告書が広く活用されますことを期待して、あいさつのことばといたします。

平成２３年３月

八千代町教育委員会教育長　高　橋　　昇

例言

1、本書は茨城県結城郡八千代町大字菅谷字香取西 124 番地における集合住宅建設工事に先立って実施した権現山遺跡の発掘調査報告書である。

2、発掘調査の期間・面積は次のとおりである。
期間：平成 21 年 2 月 17 日～ 3 月 23 日　　調査面積：約 203 ㎡

3、発掘調査および整理作業は八千代町教育委員会が主体となって実施した。調査組織は以下のとおりである。
八千代町教育委員会教育長　　高橋　昇
事務局　　八千代町教育委員会　生涯学習課
調査員　　山野井哲夫　　調査協力　　生涯学習課職員
調査作業員　　小菅　昭　　為我井憲次　　平山カネ

4、現地発掘調査は、上記期間、八千代町教育委員会山野井哲夫が担当して行った。整理作業は、平成 21 年度に遺物の台帳作成・水洗・注記・接合・写真撮影を行い、遺物実測・図面整理・トレースは、平成 22 年 6 月から平成 23 年 1 月にかけて、山野井の指導の元、及川謙作、新垣清貴、村山　卓がこれに従事した。また、報告書編集は村山が担当し、犬竹智裕・砂生智江がこれを補佐した。

5、整理作業の担当は以下のとおりである。
遺物洗浄・台帳作成・注記：山野井　　遺物接合：山野井・新垣　　遺物実測・拓本：及川・新垣・村山
図面整理：山野井　　トレース・版組：村山・犬竹・砂生　　写真撮影：山野井

6、本書の執筆は第Ⅰ～Ⅱ章・第Ⅲ章第 1 ～ 4 節・第Ⅴ章を山野井、第Ⅲ章第 5 節・第Ⅳ章第 1 節を新垣、第Ⅲ章第 6 節を及川、第Ⅲ章第 7 節・第Ⅳ章第 2 節を村山が担当した。執筆担当者名は本文各文末に示した。

7、当遺跡は平成 18 年に隣接地を試掘・確認調査しているが、その際出土した縄文土器は、当遺跡の特徴を示す資料として一部本報告書に掲載した。

8、発掘調査及び試掘・確認調査に係わる遺物・図面・写真等の資料は八千代町教育委員会で保管している。
遺物：収納コンテナ 5 箱
図面：遺構実測図（1/20）・遺物実測図・拓本図
写真：35 ㎜カラーフィルム・リバーサルフィルム・モノクロフィルム・デジタルデータ画像

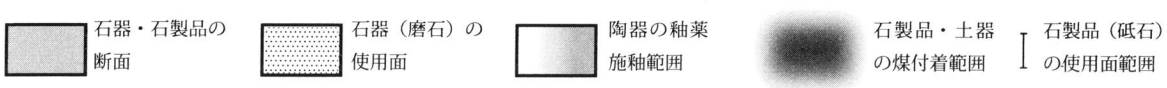
9、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで下記の機関・諸氏よりご指導・ご協力を賜った。ここに記して感謝申し上げる次第である。（順不同・敬称略）
福島三男　大東建託株式会社　有限会社ＳＫＣ　有限会社矢中建設　下妻広域シルバー人材センター
茨城県教育庁文化課　赤井博之　齋藤弘道

凡例

1、本書に用いた図面の縮尺は、各図版に添付したスケールによる。遺構に関しては、全体図を 1/100、個別実測図のうち住居跡を 1/50、井戸跡・地下式坑・土坑を 1/40 で掲載した。遺物に関しては 1/3 を基本とし、石器・石製品等の一部を 1/4、鉄製品を 1/2 で掲載した。

2、出土遺物（土器類）の色調判断は、『新版標準土色帳』（日本色研事業株式会社）を用いた。

3、遺物実測図に用いたトーン・記号は以下のとおりである。なお、石器・石製品のうち、石皿類・石棒の遺存面には、間隔の一定しないドット表現を用いた。



目次

序文
例言・凡例
目次

第Ⅰ章　調査概要・・・・・・・・・・・・・・・1
第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・1
第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・2
第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・3
第４節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・3

第Ⅱ章　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・4
第１節　遺跡の立地と地理的環境・・・・・・4
第２節　周辺の遺跡と歴史的環境・・・・・・5

第Ⅲ章　検出された遺構と遺物・・・・・・・7
第１節　遺構の概要・・・・・・・・・・・・・7
第２節　縄文時代の遺構・・・・・・・・・・・8
第３節　中世の遺構・・・・・・・・・・・・・9
第４節　その他の遺構・・・・・・・・・・・・13
第５節　縄文時代の遺物・・・・・・・・・・・14
第６節　古代の遺物・・・・・・・・・・・・・20
第７節　中世の遺物・・・・・・・・・・・・・20

第Ⅳ章　考察・・・・・・・・・・・・・・・・24
第１節　権現山遺跡における縄文時代概観・・24
第２節　中世の出土遺物・・・・・・・・・・・24

第Ⅴ章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・27

報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・29
写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

挿図目次

第１図　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２図　試掘・確認調査区配置図・・・・・・・・・・・・・2
第３図　基本土層模式図・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第４図　遺跡周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第５図　周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第６図　発掘調査区全体図・・・・・・・・・・・・・・・・7
第７図　第１号住居跡実測図・・・・・・・・・・・・・・・8
第８図　第１号井戸跡実測図・・・・・・・・・・・・・・・9
第９図　第１号地下式坑実測図・・・・・・・・・・・・・・10
第10図　第２号地下式坑実測図・・・・・・・・・・・・・・11
第11図　第３号地下式坑実測図・・・・・・・・・・・・・・12
第12図　土坑実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第13図　出土遺物実測図１（縄文時代）・・・・・・・・・・15
第14図　出土遺物実測図２（縄文時代）・・・・・・・・・・16
第15図　出土遺物実測図３（縄文時代）・・・・・・・・・・17
第16図　出土遺物実測図４（縄文時代）・・・・・・・・・・18
第17図　出土遺物実測図５（古代）・・・・・・・・・・・・20
第18図　出土遺物実測図６（中世）・・・・・・・・・・・・21
第19図　出土遺物実測図７（中世）・・・・・・・・・・・・22
第20図　権現山遺跡出土カワラケ・石臼の関連資料・・・・25
第21図　鬼怒川・小貝川流域の地下式坑調査遺跡分布図・・28

表目次

表１　周辺遺跡一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
表２　出土遺物観察表（縄文時代遺物）・・・・・・・・・・18
表３　出土遺物観察表（古代・中世遺物）・・・・・・・・・23

写真図版目次

（写真図版１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
調査区全景
第１号住居跡・東西ベルト土層断面
第１号住居跡・南北ベルト土層断面
第１号住居跡完掘状況
第１号住居跡遺物出土状況
第１号住居跡出土縄文土器
（写真図版２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
縄文時代の土器・石器
（写真図版３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第１号井戸跡土層断面
第１号井戸跡完掘状況
第１号地下式坑土層断面
第１号地下式坑竪坑部分土層断面
第１号地下式坑完掘状況
第１号地下式坑出土遺物
第２号地下式坑竪坑部分遺物出土状況
（写真図版４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第２号地下式坑土層断面
第２号地下式坑完掘状況
第２号地下式坑出土遺物
第３号地下式坑土層断面
第３号地下式坑遺物・礫検出状況
（写真図版５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第３号地下式坑完掘状況
第３号地下式坑出土遺物
第３号地下式坑出土被熱礫
第３号地下式坑出土土鍋ヘラ刻み

第Ⅰ章　調査概要

第1節　調査に至る経緯

平成18年11月22日、集合住宅建設にあたり埋蔵文化財の照会があった。計画地は約2,000㎡で現状は畑であるが、権現山遺跡の範囲内にあるため、事業者と協議の上、試掘・確認調査を実施し、遺構の状況を確認することになった。（平成18年11月28日回答）

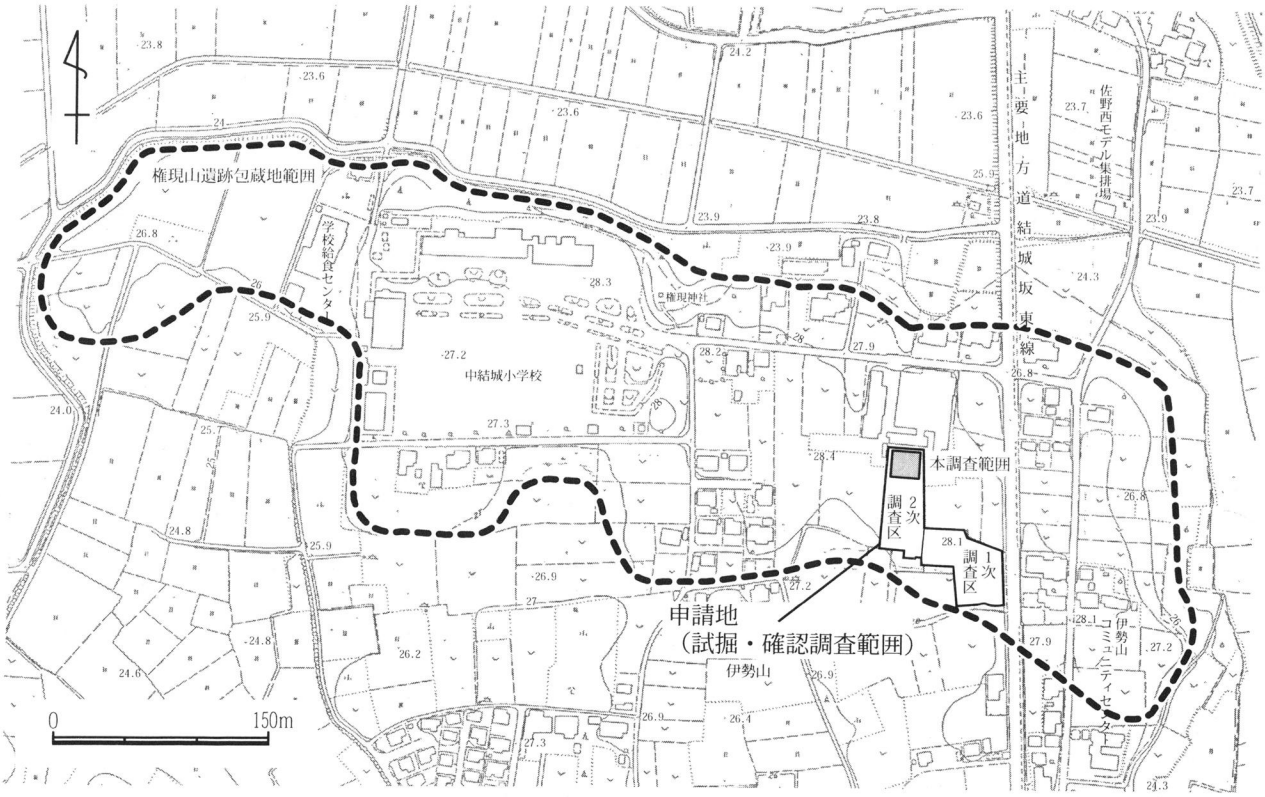
試掘・確認調査は、平成18年12月11日から12月13日にかけて実施した。その結果、中世以降と判断される土坑数基と溝跡などの遺構と縄文時代の遺物包含層の範囲を確認した。遺物包含層内で特に遺物が集中している部分は、発掘調査が必要と判断されたが、事業者との協議で計画の一部を変更することで調整することができ、工事立会で対応することになった。（1次）

（土木工事の届出：平成18年12月15日、埋蔵文化財の通知：平成19年2月2日）

平成20年10月21日、前回建設された集合住宅地の西側に隣接する約2,000㎡の畑に、同事業者から再度集合住宅を建設するにあたり埋蔵文化財の照会があった。計画地は同遺跡の範囲内にあるため、平成20年11月25日から11月27日にかけて試掘・確認調査を実施した（平成20年10月22日回答）。その結果、計画地北側の調査区で、縄文時代の竪穴住居跡及び中世以降と判断される土坑3基が集中して確認された。（2次）

（土木工事の届出：平成20年12月5日、埋蔵文化財の通知：平成21年1月15日）

遺構が確認された範囲は、集合住宅が1棟建設される予定で計画変更が難しく、遺跡の現状保存が困難であることから発掘調査が必要と判断された。発掘調査は、事業者との協議で集合住宅が建設される範囲約203㎡を対象とし、事業者負担により八千代町教育委員会が実施することになった。発掘調査は、平成21年2月17日から開始した。



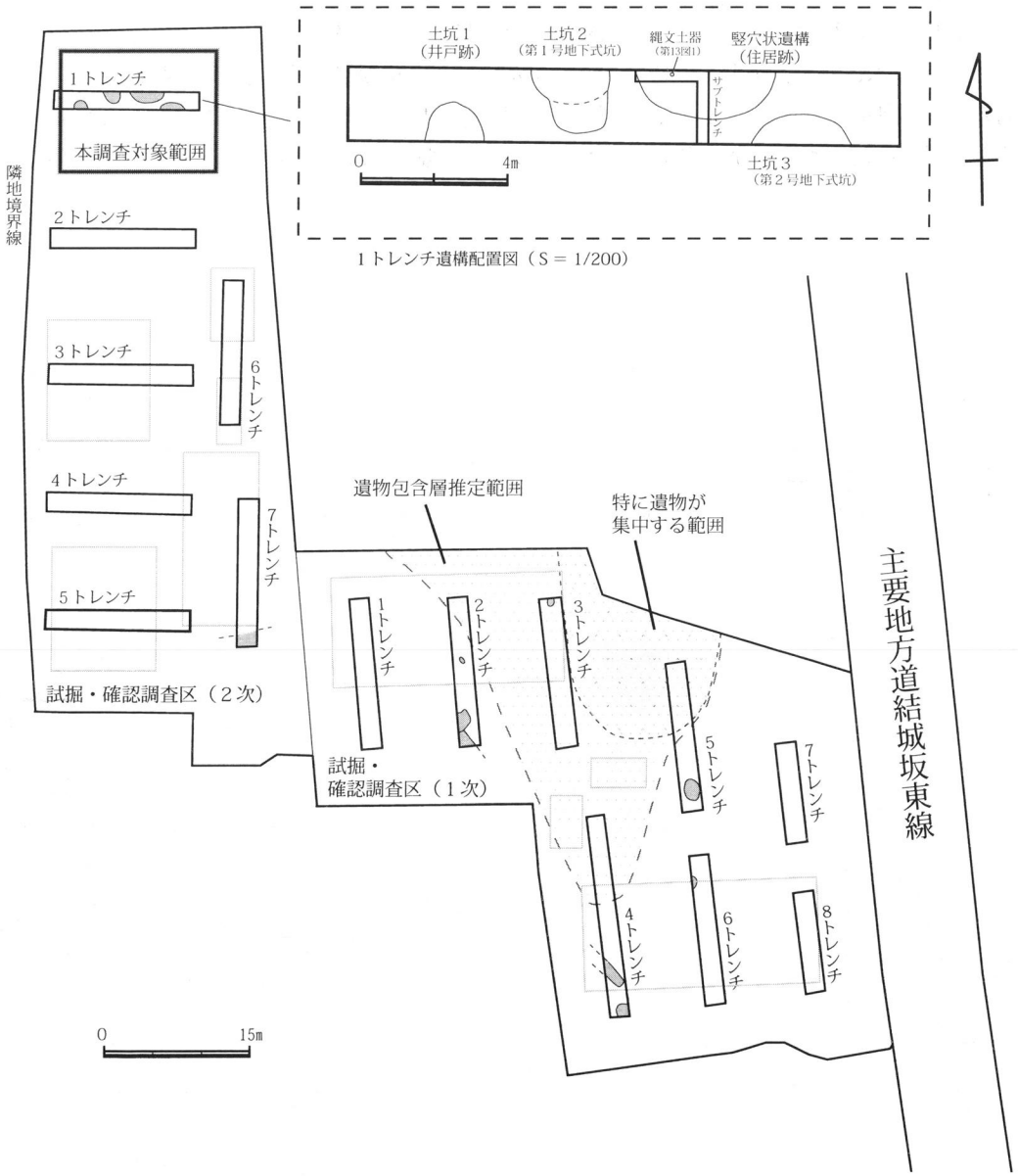
第1図　調査区位置図（八千代町都市計画図 1/2,500 を縮小して使用）

第２節　調査の方法

（１）試掘・確認調査

平成 18 年 12 月に実施した試掘・確認調査（１次）では、幅２ｍで長さ 20 ｍが１本、長さ 15 ｍが５本、長さ 10 ｍが２本、計８か所のトレンチを設定した。表土下約 45cm でローム層上面に達し、直径１～２ｍの土坑４基（２～６トレンチ）、幅約 1.4 ｍの溝状の跡１本（２・４トレンチ）及び焼土跡１か所（２トレンチ）が確認された。これらに伴う遺物は無く、覆土はいずれも黒色土にロームが混入した土で、中世以降の時期と判断された。出土遺物は３～５トレンチにかけて縄文時代中期から後期にかけての土器片が多量に出土した。３・５トレンチの北端に幅 50cm のサブトレンチを入れたところ、３トレンチで厚さ約 20cm、５トレンチで厚さ約 40cm の縄文期の遺物包含層を確認した。（出土土器は一部本報告書に掲載）

平成 20 年 11 月に実施した試掘・確認調査（２次）では、幅２ｍで長さ 15 ｍのトレンチを７本設定した。表土下約 30 ㎝から 40 ㎝でローム層上面に達し、１・７トレンチで遺構が確認された。出土遺物は縄文土器の小片が僅かに出土した程度であった。１トレンチで確認された遺構は、土坑３基及び竪穴状の遺構の一部である。３基の土坑は、その後の発掘調査によって、中世の井戸跡及び地下式坑と確認された。竪穴状の遺構は、確認作業中に出土し



第２図　試掘・確認調査区配置図

た大型の縄文土器片を中心に、幅 30 ㎝のサブトレンチをＬ字状に掘削したところ、深さ約 20 ㎝で床面と考えられる硬化した面が確認されたことから、竪穴住居跡と判断された。大型の縄文土器片は床面で横位の状態になったほぼ完形の深鉢形土器であることが確認された。

７トレンチで確認された遺構は、深さ約 60 ㎝、上幅約 1.6 ｍの溝状の遺構である。１トレンチの土坑と同じ黒色土の覆土の状況から中世以降の時期と判断された。

（２）発掘作業・整理作業

発掘調査は、試掘・確認調査（２次）で検出した縄文時代の竪穴住居跡及び中世以降と判断された土坑の調査を中心に実施した。まず調査範囲を設定し、重機により厚さ 30 ㎝から 35 ㎝の表土層を除去した。次に日本平面直角座標第Ⅸ系座標に基づく基準点を求め、調査区内に５ｍ間隔のグリットを設定し遺構確認を行った。確認した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡１軒、大型の土坑４基、その他小型の土坑 10 基を確認した。大型の土坑４基は、調査の過程で中世の井戸跡１基及び地下式坑３基であることが確認された。

遺構の調査は、土坑は、長軸方向で半裁し調査をすすめた。縄文時代の住居跡は、東西及び南北方向の十字に土層観察用のベルトを設定し４区に分けて調査を進めた。出土遺物は、覆土を上・中・下層に分けて取り上げ、一括して確認されたものは記録を取った後取り上げた。すべての遺構の調査が終了した後、調査区全体の写真を撮影し、埋め戻して調査を終了した。

整理作業は、写真・図面等の記録類及び出土遺物の水洗・注記・接合・復元・撮影まで八千代町教育委員会が行い、遺物の実測・拓本・観察等は専門の研究者の協力を得て実施した。

第３節　調査の経過

発掘作業は、平成 21 年２月 17 日から３月 23 日かけて実施したが、実働日数は 16 日間である。主な遺構の調査経過は次のとおりである。

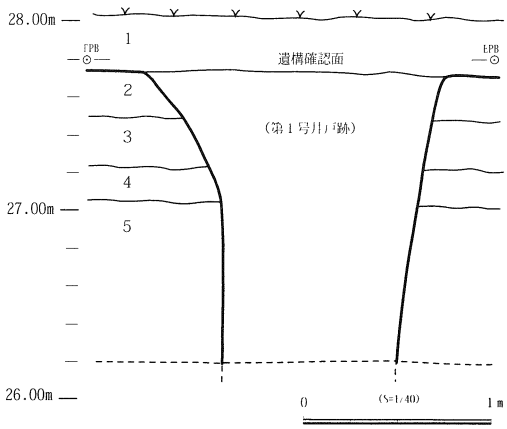
・２／17（火）～２／19（木）：調査準備、調査区設定、表土除去、遺構確認
・２／24（火）：基準杭設定等、遺構確認、遺構調査開始
・２／25（水）～２／26（木）：井戸跡及び第１号地下式坑土層調査、第２号地下式坑掘削
・３／２（月）：井戸跡完掘・記録作成、第１号地下式坑・第２号地下式坑・第３号地下式坑掘削、外
・３／３（火）～３／５（木）：第１号地下式坑完掘、第２号地下式坑及び第３号地下式坑掘削・土層調査、外
・３／９（月）～３／10（火）：第１号地下式坑記録作成、第２号地下式坑・第３号地下式坑完掘、外
・３／11（水）～３／13（金）：縄文時代住居跡調査、第２号地下式坑及び第３号地下式坑記録作成、外
・３／16（月）～３／17（火）：縄文時代住居跡土層調査・床面調査、記録作成、外
・３／18（水）：終了写真撮影・現場片付　　・３／23（月）：埋め戻し

第４節　基本層序

調査区の基本土層は、井戸跡の掘削面で観察した。

第１層：表土層、厚さ 30 ㎝～ 35 ㎝。現在の耕作土である。
第２層：黄褐色ローム層、厚さ約 20 ㎝。硬くしまる。
　　上面が遺構確認面で、遺物が出土する。
第３層：暗褐色ローム層、厚さ約 25 ㎝。硬くしまる。
　　黒色帯と思われる。
第４層：明褐色ローム層、厚さ約 20 ㎝。
　　火山灰粒子を含み、硬くしまり、粘性がある。
第５層：明褐色ローム層、厚さ約 80 ㎝まで確認。
　　火山灰粒子が目立ち、粘性が強い。

（山野井）



第３図　基本土層模式図

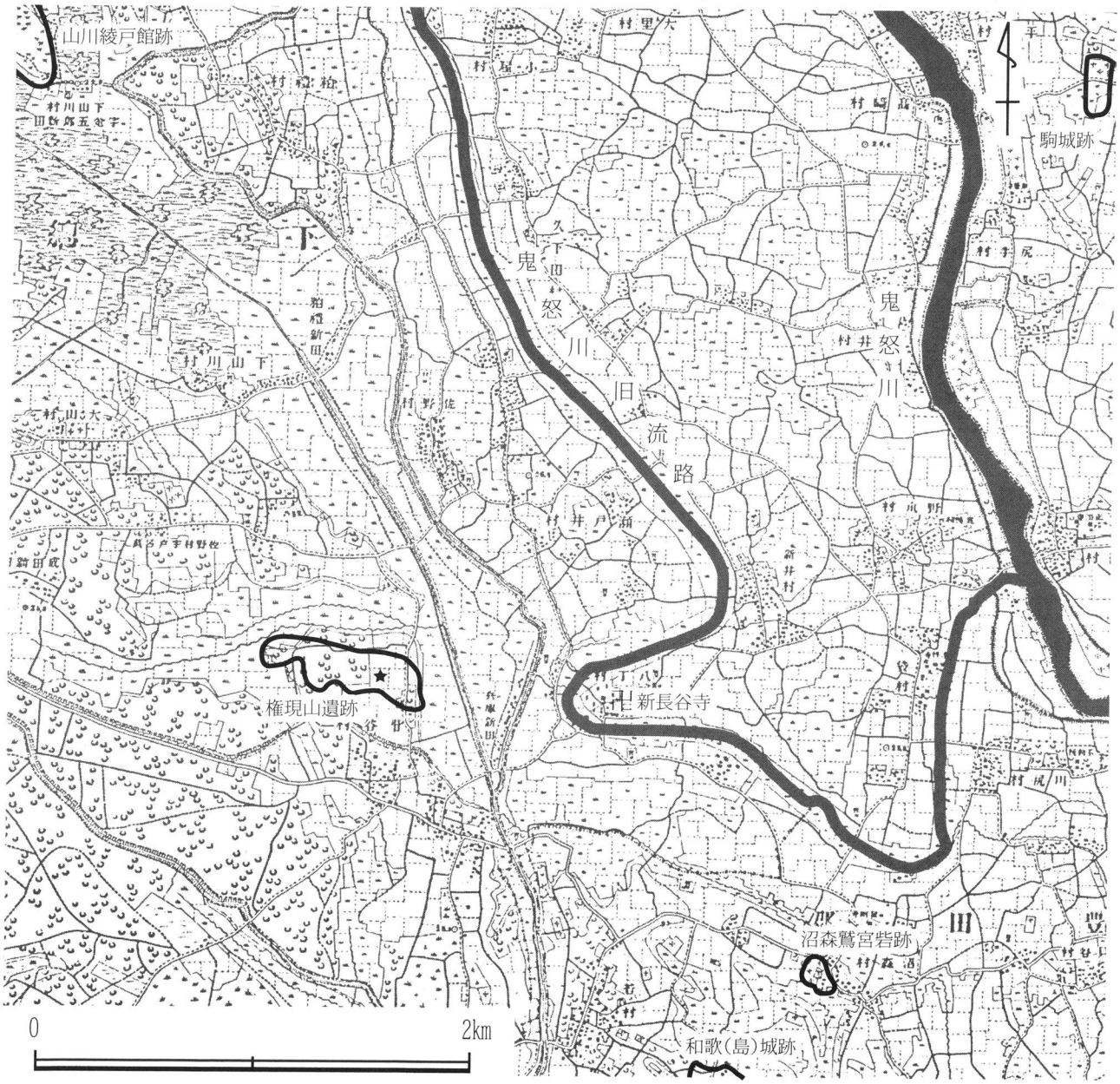
第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の立地と地理的環境

八千代町は、関東平野のほぼ中央、茨城県県西地区に位置し、東は南流する鬼怒川に接している。北西部から南東部にかけて洪積台地である結城台地からなり、東部は沖積地である鬼怒川右岸の低地、南部は飯沼川の低地から結城台地の奥深くまで続く開析谷が形成されている。

権現山遺跡は、八千代町の中結城地区大字菅谷に所在する。遺跡が立地する台地は、東側は鬼怒川右岸の低地、北側はこの低地から結城台地に深く入り込んだ北沼と呼ばれる幅約 150 mの谷津田に面し、西側は北沼につながる谷津田に囲まれる。遺跡は、北沼を臨む標高 24 mから 28 mの台地沿いに立地し、分布調査による遺跡の広がりは、東西約 750 m、南北約 250 mの広範囲に及ぶ。現状は、小学校敷地、給食センター敷地、県道、宅地、畑、山林である。

昭和 24 年に小学校用地の整地中に多量の縄文土器や石器が出土したことから、当遺跡は縄文時代を中心とした集落遺跡として知られている。分布調査では、旧石器時代、縄文時代早期・前期・中期・後期、奈良・平安時代の遺物が採取されているが、今回の発掘調査で中世まで下ることが確認された。



第４図　遺跡周辺地形図（明治 17 年　迅速図　1/20,000 を縮小して使用）

第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

権現山遺跡が所在する結城台地上には、東側に広がる鬼怒川低地に面した台地縁辺部及び台地に入り込んだ北沼の縁辺部に多くの遺跡が立地する。

旧石器時代の遺跡は現在町内で８遺跡が確認されているが、権現山遺跡周辺では、当遺跡から出土した頁岩製の小型のナイフ形石器のみである。縄文時代になると周辺では６遺跡見られるが、いずれも中期あるいは後期になってからの遺跡で、早期・前期の土器を出土する遺跡は当遺跡のみである。町内でも早期の遺跡は６遺跡と少なく、前期になると30遺跡に増加するが、この時期は縄文海進により霞ヶ浦水系では古鬼怒湾が形成され、八千代地方近くまで古鬼怒湾の奥部が迫っていたと考えられる。

広範囲な権現山遺跡の中でも、縄文時代の各時期によって中心となる地域を異にしている。旧石器を含め早期（田戸下層式・鵜ヶ島台式）・前期（黒浜式・浮島式）の時期は、北沼の奥に入った遺跡西端部の舌状台地の範囲に集中している。中期（阿玉台式･加曽利Ｅ式）になると遺跡中央部から東部の鬼怒川低地に面した地域、後期（堀之内式･加曽利Ｂ式・安行Ｉ式）では中央部から南部にかけて遺跡の広がりが見られる。権現山遺跡は、他の縄文時代の遺跡と比べて、遺跡の規模だけでなく遺物の出土量も多く、早期から後期まで継続する町内でも有数な縄文時代遺跡である。当遺跡以外で注目すべきは、大山道南遺跡 (22) からは後期のみみずく形土偶が出土しており、町内でも土偶を出土する数少ない遺跡の一つである。

弥生時代の遺跡は、町内では15遺跡確認されているが、権現山遺跡周辺では現在のところ確認されていない。

古墳時代の集落跡は、北沼を挟んで権現山遺跡の対岸に立地する旧中結城小学校庭遺跡 (6) で、平成12年の発掘調査で古墳時代後期の竪穴住居跡の一部が確認されている。古墳は当遺跡周辺では５基の円墳が確認されているが、直径40ｍ・高さ５ｍの天神塚古墳 (18)、直径20ｍ・高さ５ｍの赤城山古墳 (23) の２基が現存している。町内では西豊田地区の仁江戸に所在する仁江戸古墳群及び安静地区の栗山に所在する城山古墳群を除けば、権現山遺跡周辺は比較的古墳が多く造られた地域である。

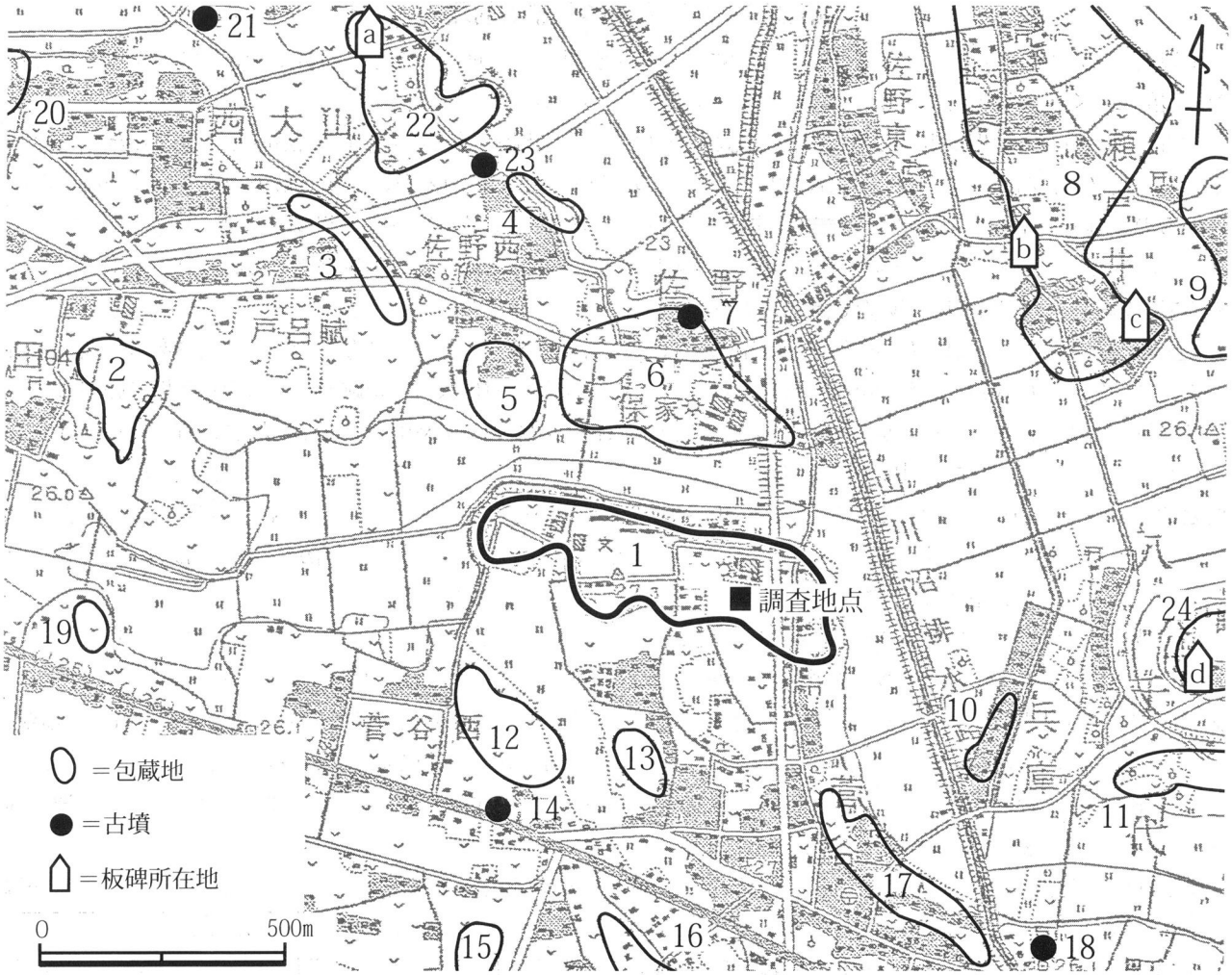
奈良・平安時代になると、分布図に示したほとんどの遺跡が成立してくる。特徴的なことは、それ以前の遺跡は結城台地縁辺部に立地していたが、この時代になると台地東側に広がる鬼怒川低地にも遺跡が見られることである。それは奈良時代に行われた鬼怒川の河川改修が大きな要因と考えられ、低地の開発が進んで来たことがうかがわれる。当時の鬼怒川は低地内を大きく蛇行して流れており、八町で突出し急激に東側に流路を変えている。権現山遺跡から東側800ｍ足らずの目前に鬼怒川が迫っていたのである。『続日本紀』の神護景雲２年 (768)8月19日の条に鬼怒川の河川改修の記録があるが、その場所がこの地域と考えられている。改修後の河道跡は絶好の耕地になったと考えられ、瀬戸井上遺跡 (8)、瀬戸井下遺跡 (9)、沼端前遺跡 (11) や堂山遺跡 (24) など奈良・平安時代の遺跡が旧河道に沿って立地している。

中世になると、権現山遺跡をはじめ周辺でもカワラケや内耳土器などの中世の遺物を出土する遺跡は少なくない。権現山遺跡では今回の発掘調査で町内で初めて地下式坑が確認されている。鬼怒川の旧河道跡で南北西側を囲まれた堂山遺跡 (24) は、南北朝時代、南朝方の駒城 (下妻市) を攻略するため築かれた砦の一つである八丁目砦跡と推定されている。この地にある新長谷寺は、寺伝によると鎌倉時代の創建と伝えられ、本尊の木造十一面観音立像は内刳り部の墨書銘から、南北朝時代貞和６年 (1350) の制作であることが確認されている。また、新長谷寺には弘安６年 (1283) 銘の町内最古の板碑 (d) や鎌倉時代と推定される２基の五輪塔が残されている。その他、周辺でも鎌倉時代から室町時代の板碑 (a・b・c) が伝えられている。戦国期の八千代地方は、結城氏や下妻の多賀谷氏の勢力圏に入り、町内でも和歌城や太田城が築かれている。

江戸時代の享保年間に始まった新田開発により、八千代地方でも飯沼の新田開発をはじめ、権現山遺跡周辺の北沼や山川沼など鬼怒川低地の諸沼も開発が行われ、徐々に水田地帯へと姿を変えていった。

＊主な参考文献
・八千代町史編さん委員会『八千代町史　通史編』1987
・八千代町史編さん委員会『八千代町史　資料編　考古Ｉ』1988
・八千代町教育委員会『八千代町遺跡地図』2003

（山野井）



第５図　周辺遺跡分布図（八千代町遺跡地図　1/25000 を縮小して使用）

表１　周辺遺跡一覧表

＊番号は第５図「周辺遺跡分布図」に対応する。

番号	遺跡名	所在	概要	遺跡番号
1	権現山遺跡	菅谷　権現山	本書報告遺跡。	114
2	新山遺跡	佐野　新山	奈良平安時代の土師器出土。	104
3	戸呂賦東遺跡	佐野　戸呂賦東	奈良平安時代の土師器出土。	105
4	赤保家遺跡	佐野　赤保家	古墳～奈良平安時代の遺跡。	106
5	佐野丸山遺跡	佐野　丸山	奈良平安時代の遺跡。	107
6	旧中結城小学校校庭遺跡	佐野　古屋敷	一部湮滅。H12 の調査で７世紀代の住居跡等確認。土師器・須恵器の他、縄文前期土器片、板碑片・土鍋片等出土。	108
7	山之神古墳	佐野　赤保家	高さ４ｍの円墳とされる。湮滅。	109
8	瀬戸井上遺跡	瀬戸井　蔵ノ下	自然堤防上に立地。奈良平安時代の土師器、須恵器・中近世の陶器が出土する。	110
9	瀬戸井下遺跡	瀬戸井　香取内		111
10	青木田遺跡	兵庫　青木田	近世の遺跡。	112
11	沼畑前遺跡	菅谷　沼畑前	奈良平安時代・中世の複合遺跡。	113
12	向寺前遺跡	菅谷　向寺前	縄文時代・奈良平安時代・中世の複合遺跡。土師器等出土。	115
13	伊勢山遺跡	菅谷　伊勢山	縄文時代・奈良平安時代の複合遺跡。	116
14	菅谷古墳	菅谷　山王	径 15m、高さ５ｍの円墳とされる。道路工事に際して、玉石多数・人骨が出土。湮滅。	117
15	伊勢山中台遺跡	菅谷　中台	奈良平安時代の土師器等出土。	118
16	廣町遺跡	菅谷　廣町	奈良平安時代の土師器、須恵器・中近世の土師質土器・陶器が出土する。	119
17	高野台遺跡	菅谷　高野台	縄文時代・奈良平安時代・中世の複合遺跡。	120
18	天神塚古墳	菅谷　天神	径 40 ｍ、高さ５ｍの円墳。	121
19	廿四本遺跡	菅谷　廿四本	古墳時代・奈良平安時代の遺跡。	123
20	屋敷添西遺跡	西大山　屋敷添西	縄文時代・奈良平安時代の複合遺跡。	125
21	香取塚古墳	西大山　香取脇沼端	径 25 ｍ、高さ６ｍの円墳。湮滅。	126
22	大山道南遺跡	西大山　大山道南	縄文中、後期の土器やミミズク形土偶・土師器・須恵器が出土。縄文時代・奈良平安時代・中世の複合遺跡とされる。	127
23	赤城山古墳	佐野　笹目館	径 20 ｍ、高さ５ｍの円墳。墳丘一部削平。	128
24	堂山遺跡	八町　堂山	奈良平安時代・中世の遺跡。遺跡内に新長谷寺が立地。14 世紀代の観音立像を始め中世の曼荼羅・護摩壇等伝来。	162
a	板碑所在地	村貫地内	応永二十年（1413 年）銘阿弥陀一尊種子板碑。	
b	板碑所在地	瀬戸井下共同墓地	15 世紀代の阿弥陀一尊種子板碑。	
c	板碑所在地	瀬戸井下地内	弘安六年（1283）銘阿弥陀一尊種子板碑。	
d	板碑所在地	八町　新長谷寺	弘安六年（1283）銘阿弥陀一尊種子板碑。同所所在の他の板碑５基は他所から移入。	

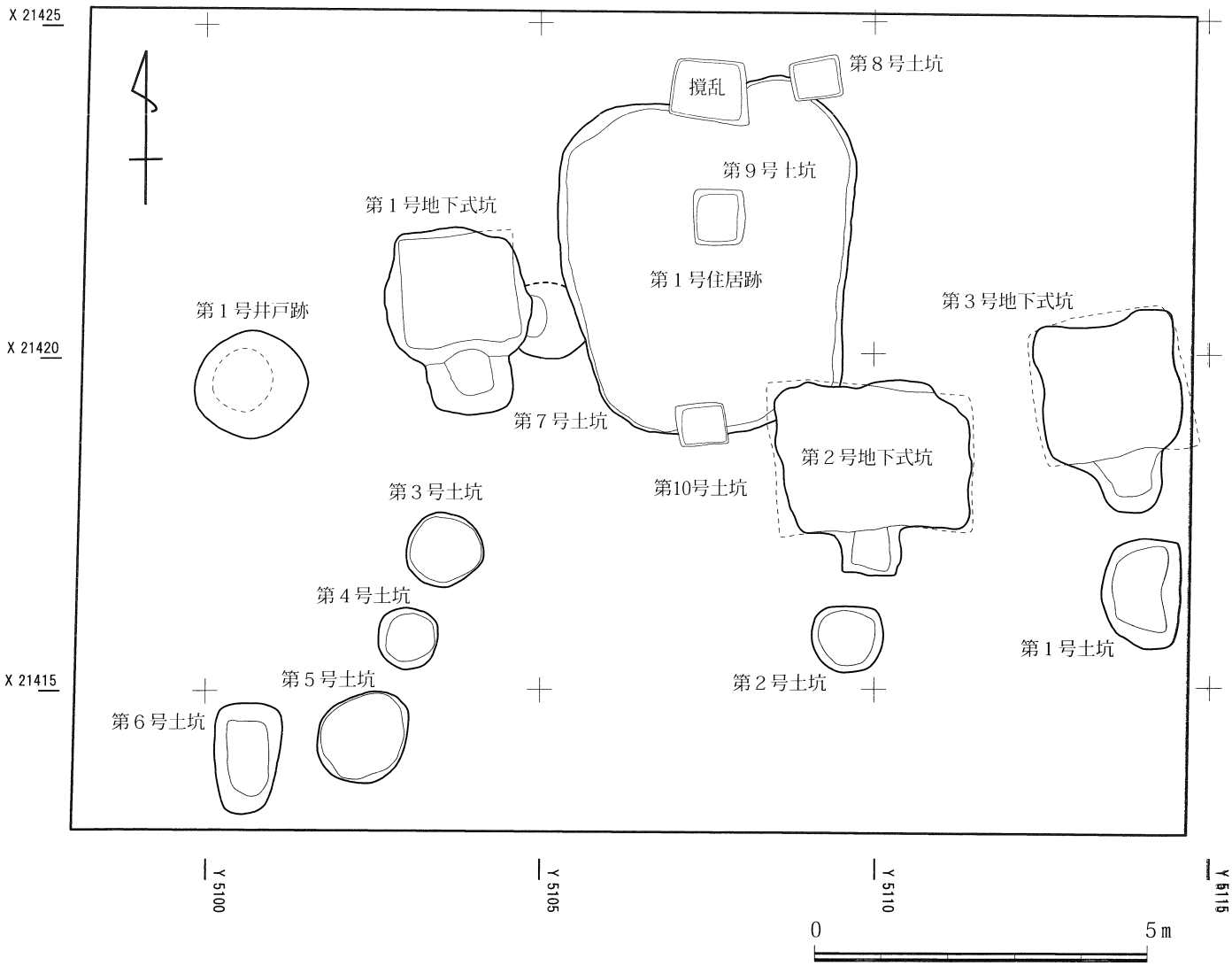
第Ⅲ章　検出された遺構と遺物

第１節　遺構の概要

発掘調査は約 203 ㎡の範囲を対象に実施した。確認作業中出土した遺物は、調査区の北寄り中央部、東南部、西南部に比較的集中して縄文土器片等が出土したが、１次の試掘・確認調査した地区と比べると出土量は非常に少なかった。また、後の住居跡の調査でも覆土の厚さが 20 ㎝足らずと薄いことから、調査区は後世の削平を受けていると思われる。

確認された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡１軒 (第１号住居跡)、中世の井戸跡１基、地下式坑３基、その他土坑 10 基である。第１号住居跡からは、試掘・確認調査において完形に近い深鉢形土器が出土している。地下式坑は３基とも、方形の地下室の南側に竪坑部を持っている。出土遺物はたいへん少なく、覆土内には縄文土器片が混入しているが、須恵器や土師質土器などが出土している。

１号住居跡を切っている第８号・第９号・第 10 号土坑は、覆土中に僅かに縄文土器片が混入していたが、黒色土の非常に柔らかい覆土で、同じく第１号住居跡を切っている明らかに近代以降に掘られた撹乱と同様の土であることから本報告から除外した。　（山野井）



第６図　発掘調査区全体図

第２節　縄文時代の遺構

第１号住居跡

位置　調査区の北寄り中央部に位置する。住居跡の北壁は撹乱及び第８号土坑、中央部は第９号土坑・南壁は第 10 号土坑、東南隅は第２号地下式坑に切られる。長軸方向は、ほぼ真北を示す。

規模・形状　長軸約 5.0 m、短軸約 4.4 m、深さ約 15 ～ 20 ㎝、隅丸の長方形を呈する。

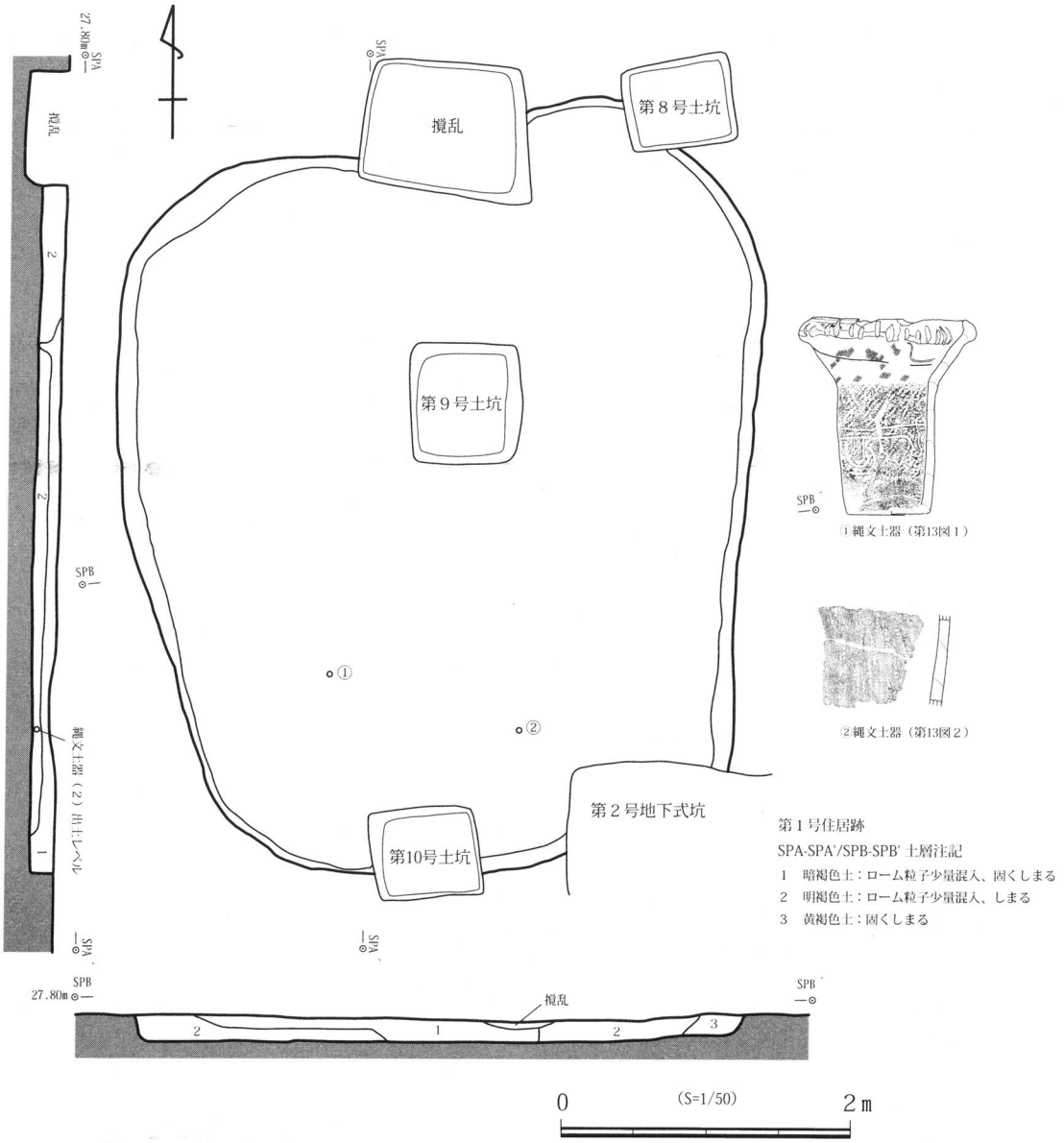
覆土　硬くしまった土で、土層は３層に分けられる。壁際の堆積状況から自然堆積と判断される。確認面から床面までの深さが浅いことから、後世の削平を受けていると思われる。

構造・施設　住居跡内には、炉跡や柱穴、壁溝、土坑などは特に認められなかった。床面は住居址中央部から壁近くまで固くしまっているが、壁周辺はあまり硬化した面は見られない。

出土遺物　試掘・確認調査の際、住居址の南西部で、床面から口縁部を西に向け横位の状態で完形に近い深鉢形土器（第 13 図 1）が出土した。本調査では、覆土内から縄文土器片（第 13 図２～９）及び磨製石斧（第 15 図 44）が１点出土したが、出土量は多くない。

時期　試掘・確認調査で床面から出土した深鉢形土器から、縄文時代中期後半の住居跡と判断される。

（山野井）



第７図　第１号住居跡実測図

第３節　中世の遺構

中世の遺構は、井戸跡１基、地下式坑３基を調査した。調査当初は黒色土を覆土とする円形あるいは楕円形の大型の土坑としていたが、調査の過程で井戸跡と地下式坑であることが確認された。特に第１号及び第２号地下式坑は、確認段階では竪坑部を把握できず横軸方向に半裁したので、南壁中央部に竪坑部の掘り込みを確認して地下式坑と判断できた。第３号地下式坑は、確認段階で地下室南側に突出した竪坑部が確認できたので、南北方向に半裁して調査した。

第１号井戸跡

位置　調査区の西寄り中央部に位置する。

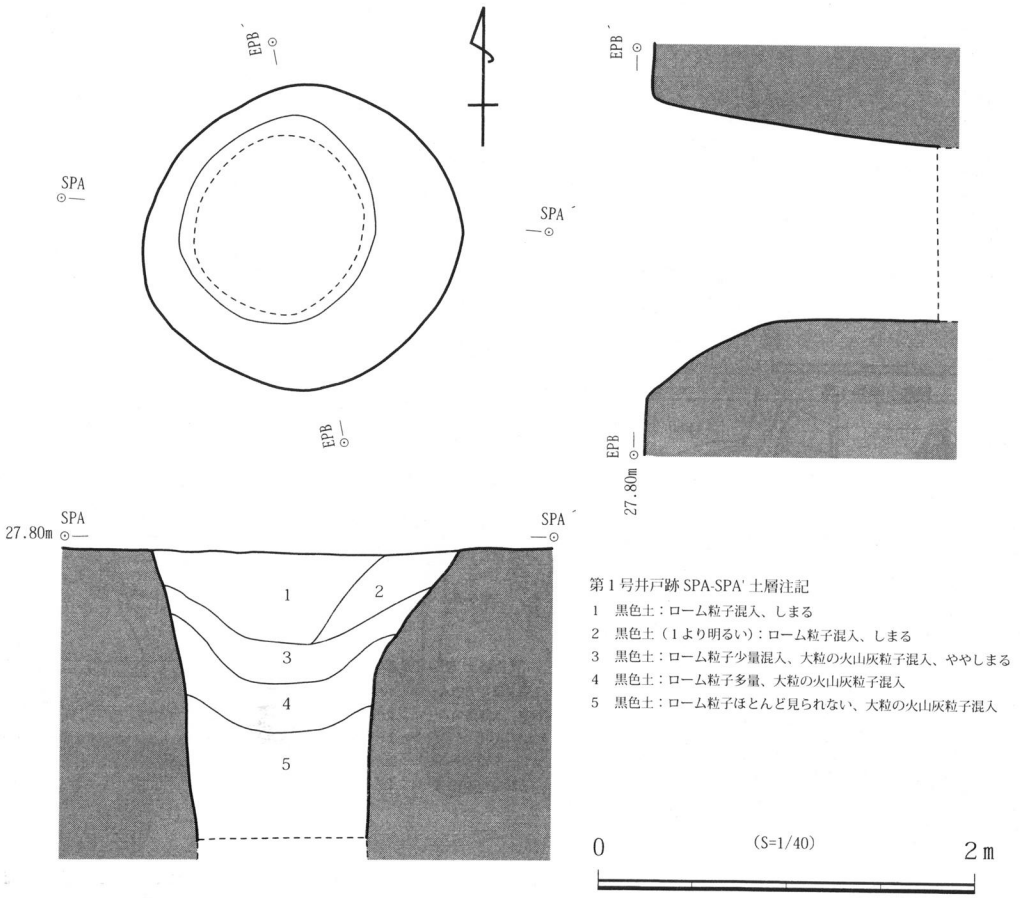
規模・形状　直径約 1.6 m～ 1.7 mのほぼ円形を呈する。

覆土　調査では約 1.6 mの深さまで掘り下げることができたが、底面をピンポールで確認したところ、更に１m以上深いことが確認された。確認できた土層は５層で、いずれも黒色土を主体とする土である。

構造　井戸跡の断面形は、東南部の立ち上がりは深さ約 60 ㎝のところから約 55°の傾斜で外側に開いているが、西側は約 75°の傾斜で急激に立ち上がる。それ以下は、ほぼ垂直に掘り下げられており、直径約１mの円形を呈している。

出土遺物　出土量は極めて少ない。覆土１層から４層まで少量の縄文土器片や小礫が混入している他、鉄製品（第 18 図 17）や４層から磨製石斧（第 15 図 45）が１点出土した。

時期　覆土中から出土した遺物からは遺構の時期を判断することはできないが、地下式坑と同様な黒色を呈する覆土の状況から、中世の地下式坑と同時期の遺構と推定される。



第８図　第１号井戸跡実測図

第１号地下式坑

位置　調査区中央部よりやや北西寄りに位置する。東壁で第７号土坑を切っている。竪坑部が南側にあり、軸方向はN－10°－Wを示す。

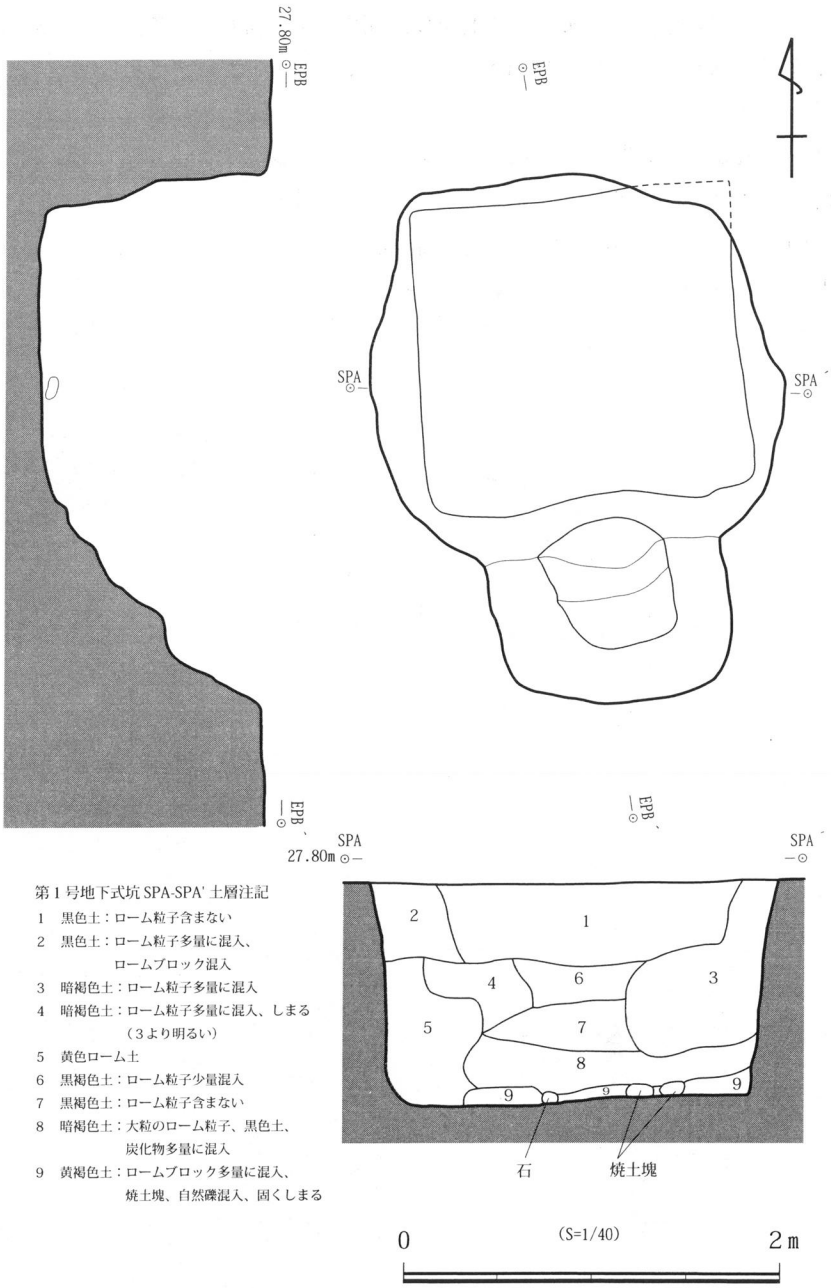
規模・形状　地下室はほぼ正方形を呈し、竪坑部は隅丸の方形を呈する。軸長約2.7 m、地下室の奥行き約1.6 m、横軸約1.7 m、深さ約1.2 mである。地下室の高さは、天井が崩落しているため不明である。竪坑部の幅は約1.2 m、奥行き約1.1 mである。

覆土　土層は横軸の断面を観察したが、９層に分けられる。１層、２層、及び６層から９層は黒色土主体の自然堆積、３層から５層はローム土、ロームを多量に含んだ土層で天井からの崩落土と考えられる。軸方向の土層は観察できなかったが、竪坑部の土層は黒色土の自然堆積であることから、竪坑部からの流入により６層まで堆積した後、地下室の天井が両横から崩落したと推定される。最下層の９層は固くしまり、ロームブロック及び長さ約20 ㎝代の大型の焼土塊が多数底面に認められた。その上層の８層は、多量の炭化物が混入していた。

構造・施設　竪坑部は２段の階段状を呈する。地下室の底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。北東隅部の壁は、底面から高さ約１mのところで内側に約10 ㎝から15 ㎝ほど迫り出しており、天井につながる状況が確認された。その他、地下室内には土坑などは認められなかった。

出土遺物　出土量は少なく、覆土全体に縄文土器片や小礫が混入している他、縄文時代の石皿（第15図49）、覆土下層から須恵器短頸壺の胴部片（第17図）、土師質土器の小皿（第18図1）、内耳土器口縁部（第18図2）、底部（第18図3）が出土した。その他、地下室底面中央部及び東壁際下層から自然礫が出土した。

時期　出土した中世遺物の時期から、15世紀後半から16世紀にかけての遺構と推定される。



第９図　第１号地下式坑実測図

第２号地下式坑

位置　調査区中央部よりやや南東寄りに位置する。北西隅で第１号住居跡を切っている。竪坑部が南側にあり、軸方向はほぼ真北を示す。

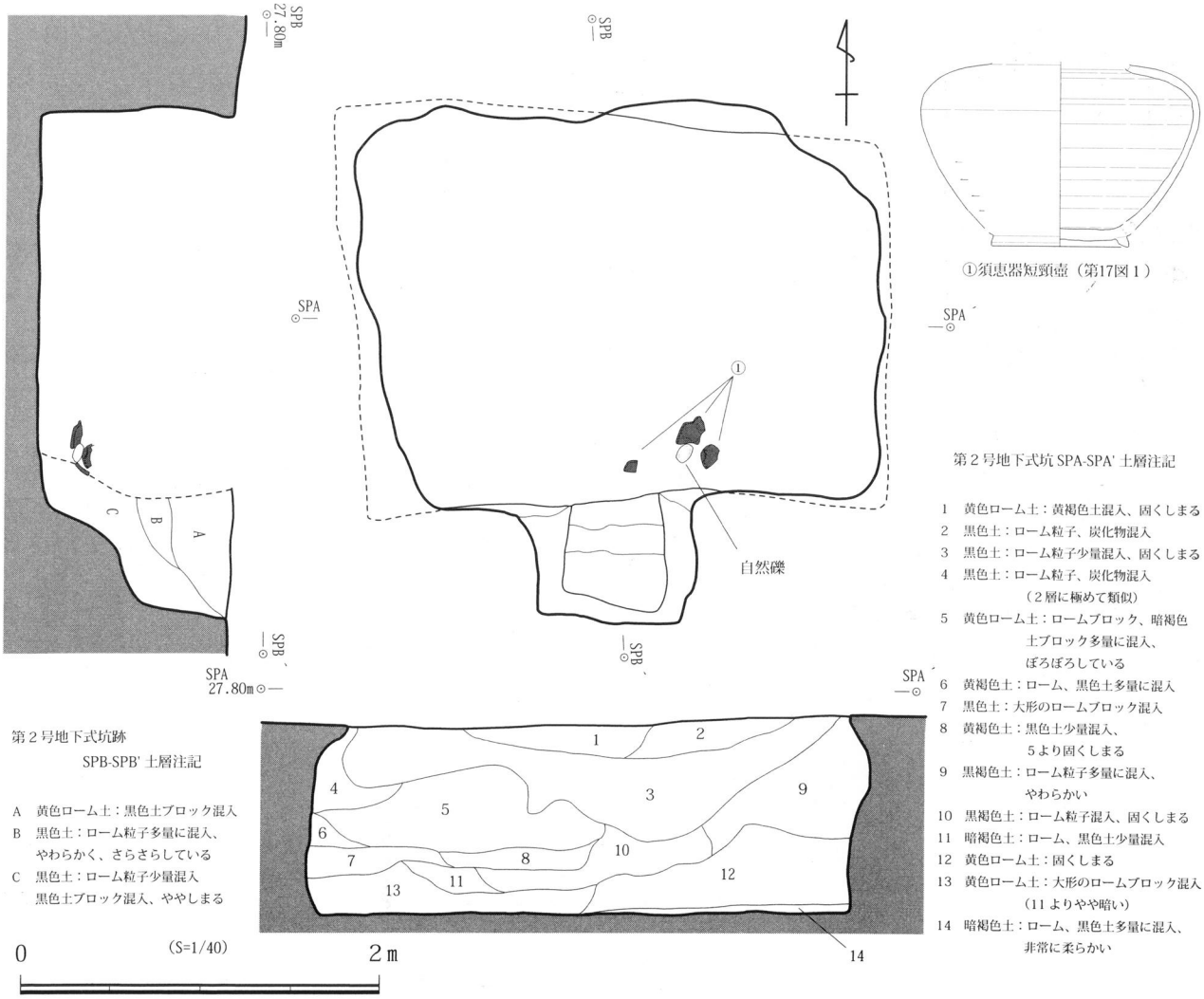
規模・形状　地下室は横長方形を呈し、竪坑部は方形を呈する。軸長約 2.9 m、地下室の奥行き約 2.2 m、横軸約 3.0 m、深さ約 1.1 mである。地下室の高さは、天井が崩落しているため不明である。竪坑部の幅は約 0.9 m、奥行き約 0.7 mである。

覆土　土層は横軸の断面を観察したが、14 層に分けられる。地下室の堆積状況は、竪坑部から流入したと考えられる最下層（14 層）が薄く底面に堆積し、その後天井部（12･13 層）が剥がれ落ち、その上に竪坑部からの流入（7～11 層）があり、最終的に天井（５・６層）が崩落して埋没したと推定される。竪坑部では黒色土（Ｂ・Ｃ層）の流入の後、最上層（Ａ層）は竪坑部付近の天井の崩落によりロームで塞がれたような堆積状況である。

構造・施設　竪坑部は１段の階段状を呈する。地下室の底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。地下室底面から高さ約 90 ㎝のところで周囲の壁が約 20 ㎝から 30 ㎝ほど内側に迫り出しており、天井につながる状況が確認された。その他、地下室内には土坑などは認められなかった。

出土遺物　出土量は少なく、覆土全体に縄文土器片や小礫が混入し、縄文時代の石斧（第 15 図 46）、磨石（第 15 図 47）が出土している。竪坑部から流入した黒色土からは大型の須恵器片が一括して出土しており、短頸壺（第 17 図１）が復元された。中世の遺物（第 18 図４～11・16）としては、覆土内から甕や茶壺などの陶器片、小皿や鍋などの土師質土器、釘と思われる鉄製品、砥石などが出土した。

時期　出土した中世遺物の時期から、15 世紀後半から 16 世紀にかけての遺構と推定される。



第 10 図　第２号地下式坑実測図

第３号地下式坑

位置　調査区の東端中央部に位置する。竪坑部が南側にあり、軸方向はＮ－ 20°－Ｗを示す。

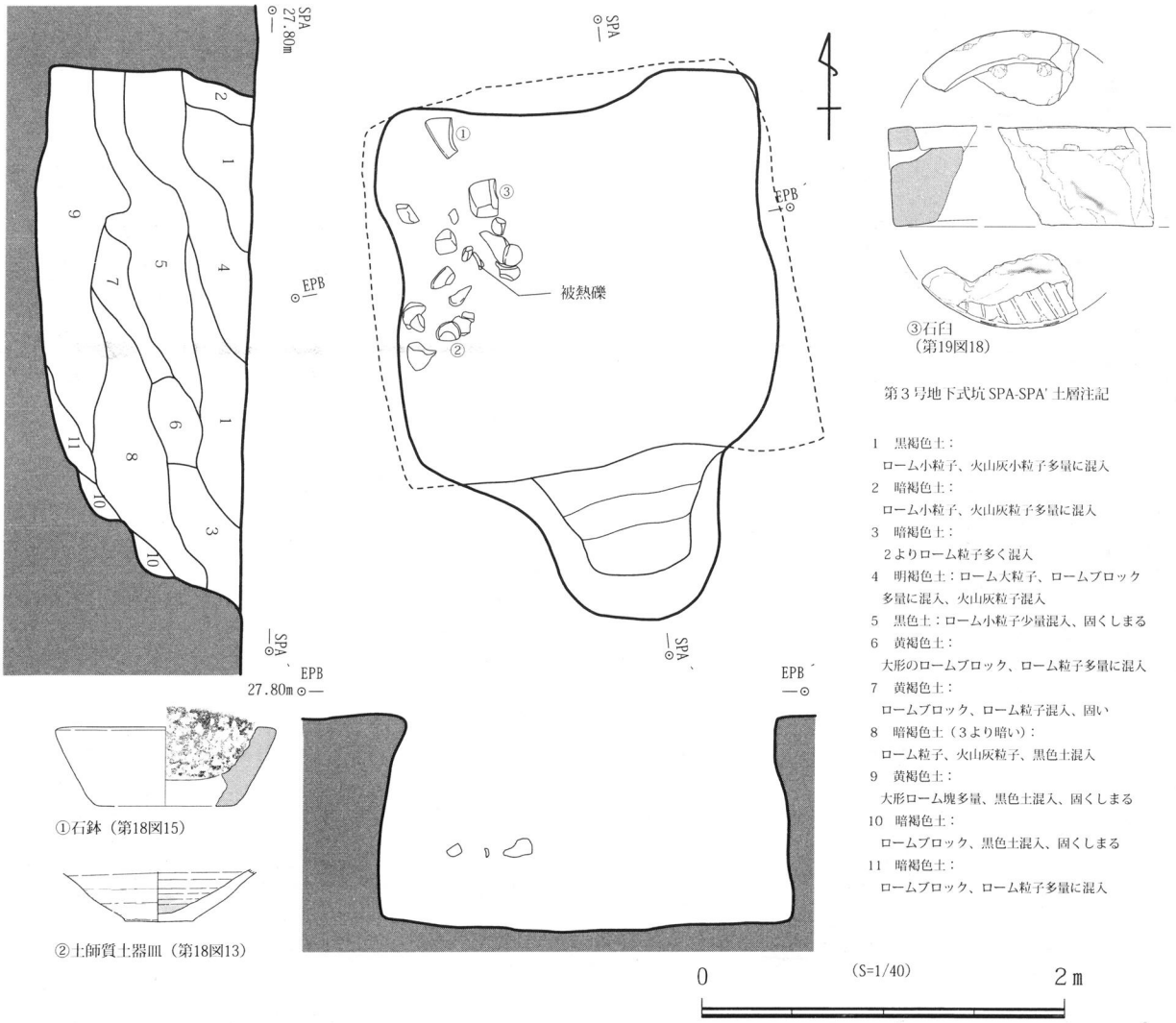
規模・形状　地下室はほぼ正方形を呈し、竪坑部は楕円形を呈する。軸長約 3.0 m、地下室の奥行き約 2.1 m、横軸約 2.3 m、深さ約 1.2 mである。地下室の高さは、天井が崩落しているため不明である。竪坑部の幅は約 1.0 m、奥行き約 0.9 mである。

覆土　土層は縦軸の断面の観察で 11 層に分けられる。堆積状況は、竪坑部から流入した自然堆積の状況を呈するが、地下室の底面には天井から崩落したと考えられる崩れたローム層（９層）が約 30 ㎝から 40 ㎝と厚く堆積している。また４・６・７層もロームブロックを多量に含んだ層であることから、数度にわたって天井が崩落したものと推定される。この崩落土（６・７・９層）の上に堆積した黒色土（５層）から大型の礫が多量に出土した。

構造・施設　竪坑部は２段の階段状を呈する。地下室の底面はほぼ平坦であるが、中央に向かってなだらかに窪んでいる。壁は内側に緩やかに傾斜しながら立ち上がる。第２号地下式坑と同様に、地下室底面から高さ約 90 ㎝のところで周囲の壁が約 20 ㎝から 30 ㎝ほど内側に迫り出しており、天井につながる状況が確認された。その他、地下室内には土坑などは認められなかった。

出土遺物　出土量は少なく、覆土全体に縄文土器片や小礫が混入している。黒色土（５層）から一括して多量に出土した大型の礫に混じり、縄文時代の石皿（第 15 図 48）や石棒（第 16 図 50）、土師質土器の皿（第 18 図 13）や鍋（第 18 図 14）、石鉢（第 18 図 15）や石臼（第 19 図 18）などが出土した。

時期　出土した中世遺物の時期から、15 世紀後半から 16 世紀にかけての遺構と推定される。　（山野井）



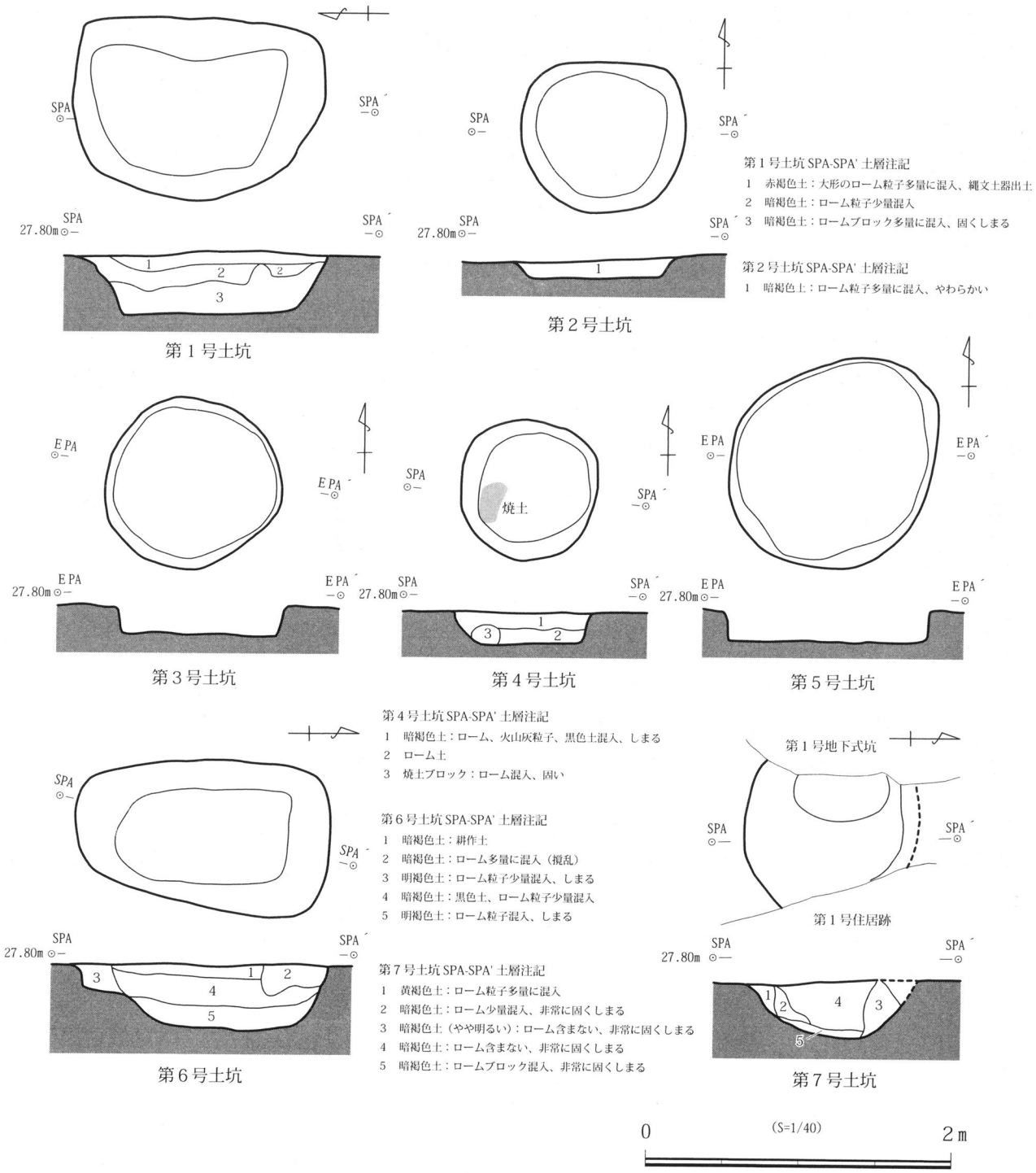
第 11 図　第３号地下式坑実測図

第４節　その他の遺構

土坑

土坑は７基確認したが、覆土中から少量の縄文土器片等が出土した程度で、時期、性格は不明である。

第１号土坑は、長軸約 1.6 m、短軸約 1.2 m、深さ約 40 ㎝の楕円形を呈する。１層・２層から縄文土器片が他の土坑より比較的多く出土した。第２号土坑から第５号土坑は、直径約 0.9 mから 1.3 m、深さ約 10 ㎝から 20 ㎝と浅い土坑で、円形を呈する。第４号土坑の底面に焼土塊が認められた。第６号土坑は、長軸約 1.6 m、短軸約 0.9 m、深さ約 40 ㎝の楕円形を呈する。第７号土坑は、直径約 1.1 m、深さ約 35 ㎝で円形を呈する。東側を第１号住居跡、西側を第１号地下式坑に切られている。他の土坑と比べ、覆土は非常に固くしまっている。　（山野井）



第 12 図　土坑実測図

第５節　縄文時代の遺物

縄文時代の遺物（第 13 図～第 16 図）は、住居跡内ほか殆どが地下式坑の埋没土中からの出土であった。時期は縄文時代中期前葉から中葉・後葉が主体である。

第 13 図１～９は第１号住居跡出土のもの。１は住居跡床面直上出土で、調査区のなかで最も遺存状態の良好なものである。地文に単節ＲＬを充填し、二重の沈線を横位に押し引きする。垂下する一方は渦巻き文を構成。口辺部は「く」の字状で、縦の条線を施文する。大木８ａ式と考えられる。

２は深鉢の胴部片。３は頸部で、単節ＲＬ充填、隆帯脇に一列の沈線。５は胴部片。縦の磨消縄文帯で、加曽利Ｅ３式とみられる。６～９は阿玉台式と考えられる一群。６は口辺直下に横方向に一列の角押文を施文。

10～22 が第３号地下式坑出土のもの。10･11 は勝坂系の土器群。10 は爪形文の隆帯を口辺付近上部に貼付する。11 は胴部片。隆帯によって逆三角形文を構成、隆帯脇に幅広爪形文を施文する。12 は口縁部。無文地で、横位に二重沈線を施文する。13 も勝坂系と思われる一群で、口縁部直下に渦巻き状隆帯を貼付し、隆帯脇に一列の角押文を施文する。14～16 は加曽利Ｅ３式からＥ４ないしは大木式と考えられるもの。14 は口縁部で、縦楕円区画の磨消縄文を施文する。15・16 も磨消縄文帯。17 は口縁部で、口縁区画文を持つ。加曽利Ｅ２式からＥ３式と考えられる。19・20 も磨消縄文を施文。磨消帯の幅が広く、楕円形を呈しており加曽利Ｅ４式ないし大木９ａ式期の並行と思われる。21 も加曽利Ｅ式。無節Ｌで、横方向の沈線を押し引きし区画。22 は単節ＬＲで、口縁部直下に横方向の沈線を押し引き。

23 は第１号地下式坑から出土した胴部片。無節Ｌで、縦位の蛇行沈線を垂下。

第 14 図 24・27～35 までは第２号地下式坑出土のもの。24 は加曽利Ｅ４式と思われる深鉢で、単節ＲＬで施文したのち、縦位の楕円区画の磨消帯を表出。区画文の間にはＳ字状沈線を描く。大木９ａ式並行であろうか。

28 は阿玉台式の把手部分。胴部は沈線による文様構成を主体とする。把手の上面に刻みを施文し、沈線を幾重に押し引きする。ミミズクをデフォルメしたもの。29～30 は加曽利Ｅ３式からＥ４式と思われる。31 は阿玉台式の浅鉢の口縁部、朱の痕跡が見られる。32～33 は加曽利Ｅ３式。34 は阿玉台Ⅲ式の胴部片。35 は加曽利Ｅ式の胴部片で、単節ＲＬを施文。磨消縄文を表出。

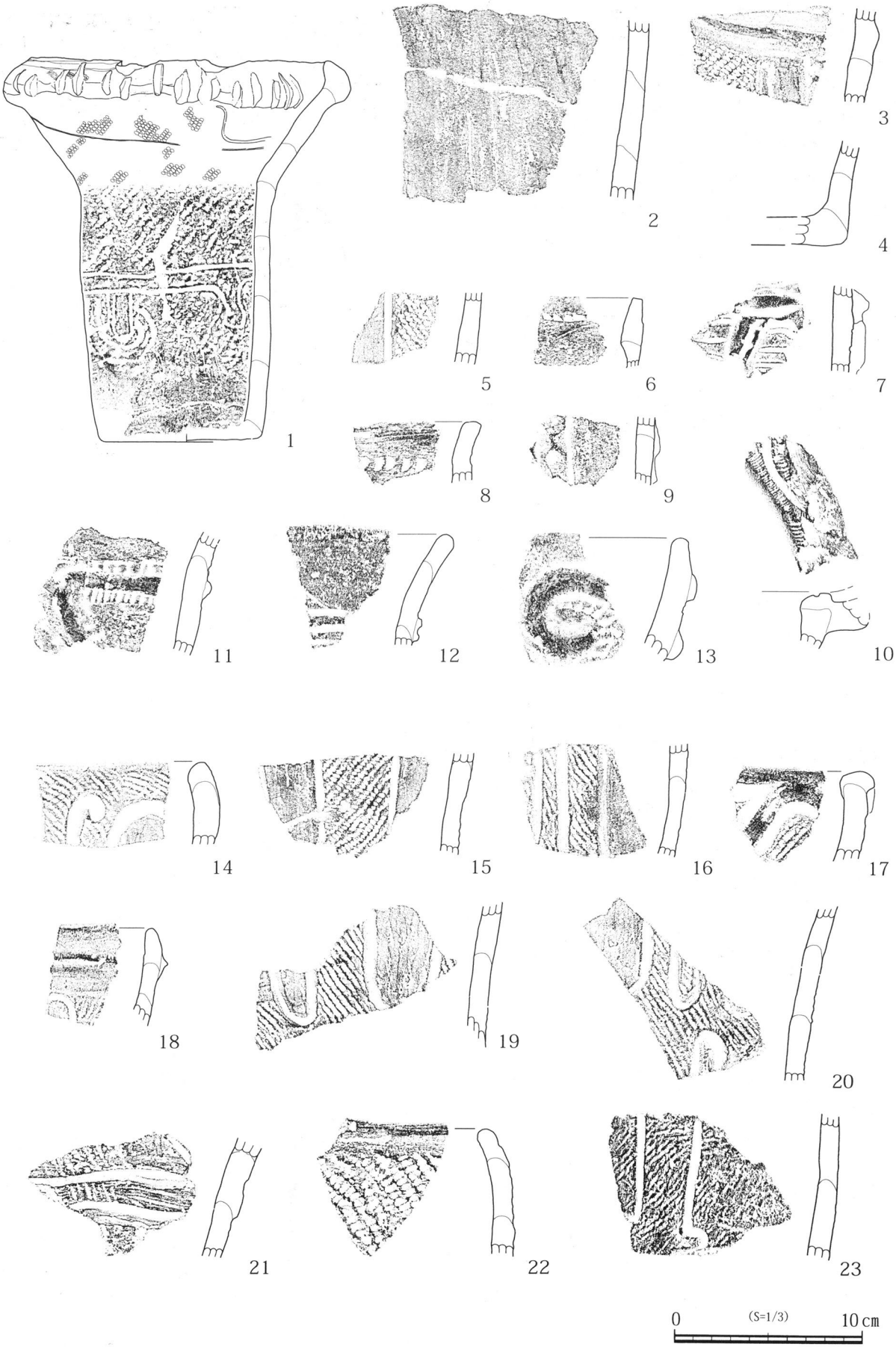
第 14 図 25・36～39、第 15 図 40～43 の遺物は試掘・確認調査（1 次）出土のもの。25 は５トレンチから出土した阿玉台式の深鉢。単節ＬＲを施文した後、頸部に横方向の二重沈線を押し引きし、縦位の沈線ほか渦巻きを構成する。縄文は口縁部まで施文する。阿玉台Ⅳ式である。36 は３トレンチ出土で加曽利Ｅ式の浅鉢。口縁部に横方向の沈線によって楕円区画を構成し、区画と区画の間に一条の沈線を垂下。

37～41・43 は５トレンチ出土。37～38 は加曽利Ｅ式の口縁部片。37 は口縁直下に縦の刻みが見られ、以下、条線を垂下。38 は加曽利Ｅ３式の口縁部で、単節ＲＬを施文したのち、隆帯による渦巻き文を構成する。39 は阿玉台式の浅鉢。40 は加曽利Ｅ式の口縁部。単節ＬＲを施文したのち、隆帯によるクランク文を構成。加曽利Ｅ３式。41 は阿玉台Ⅳ式の口縁部。単節ＲＬを施文し、隆帯による三角形の文様構成。42～43 は加曽利Ｅ式と思われる深鉢の底部片。

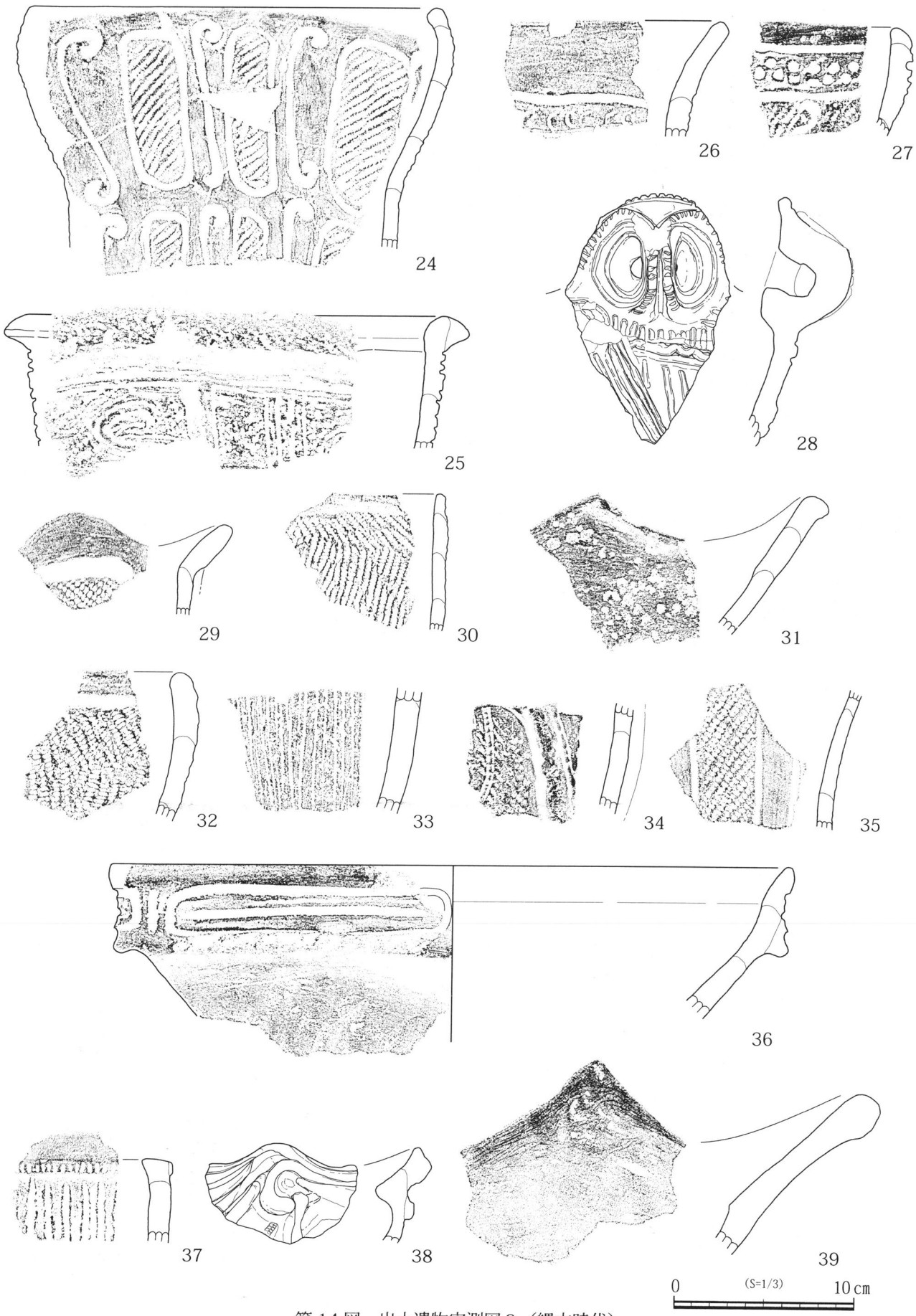
第 15 図 44～49、第 16 図 50 は石器類である。44 は住居跡出土の安山岩製磨製石斧で、刃部の一部が欠損する。

45 は第１号井戸跡出土で、蛇紋岩製の磨製石斧。表裏はよく研磨される。46～47 は第２号地下式坑出土で 46 は蛇紋岩製磨製石斧。刃部を敲打し打製石斧として再利用したものとみられる。47 は磨石。石材は安山岩で、握り拳ほどの大きさに３面の使用面がみられる。48･50 は第３号地下式坑出土のもの。48 は石皿。凹石に使用している。安山岩製。50 は安山岩製の大型石棒。両端部は破損するが、側面２か所に対向して穿孔がみられる。

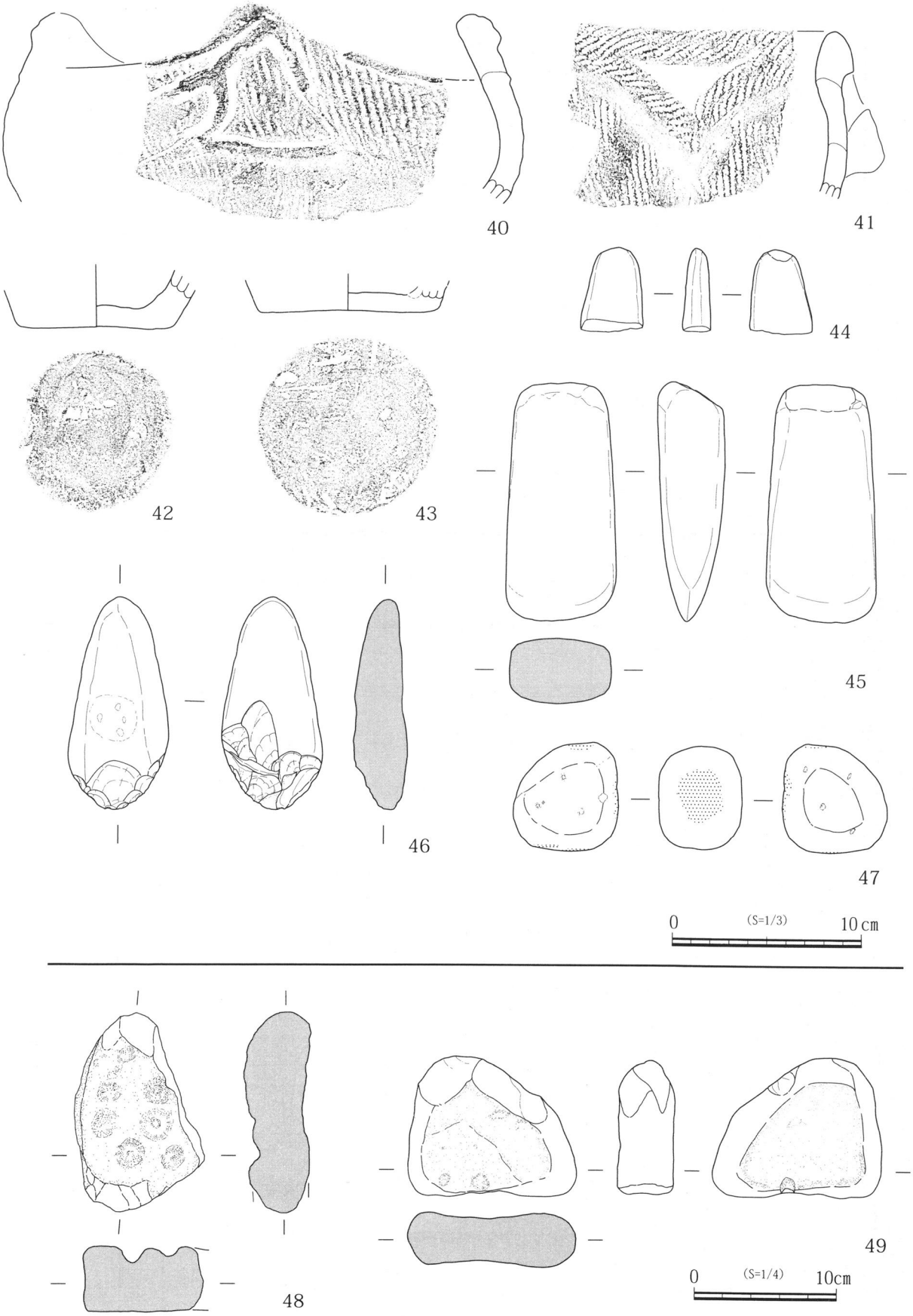
（新垣）



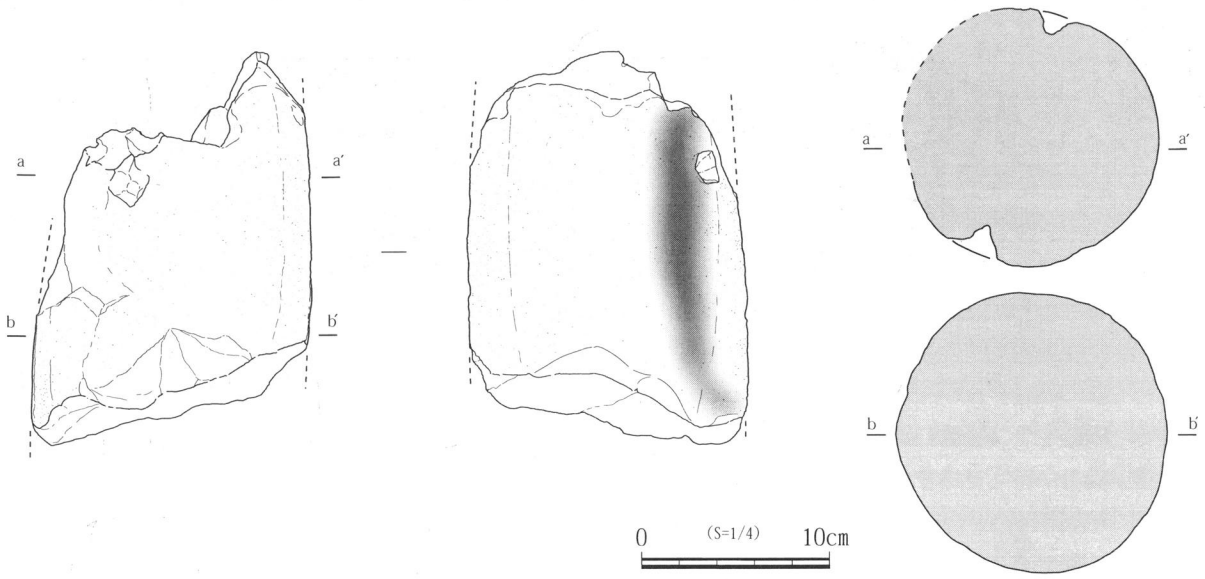
第 13 図　出土遺物実測図 1（縄文時代）



第14図　出土遺物実測図2（縄文時代）



第 15 図　出土遺物実測図３（縄文時代）



第 16 図　出土遺物実測図 4（縄文時代）

50

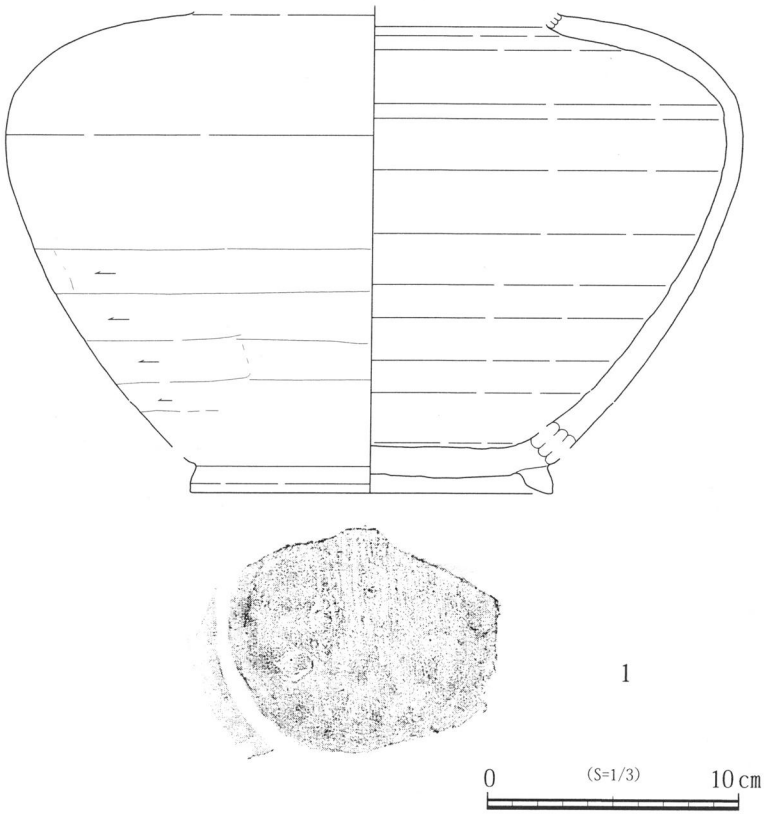
表２：出土遺物観察表（縄文時代遺物）

本表の凡例：「法量」の単位はcm、重量はｇである。なお、突起を持つ縄文土器の口径は、突起上端部ではなく口唇部分で測定した。
出土位置の項では以下の通り略称を用いる。［1 号住居跡→住居　地下式坑→地下　1 号井戸跡→井戸　試掘・確認調査 (1 次) トレンチ→トレ］

挿図番号	出土位置	名称・器種	型式	法量	胎土	色調	焼成	施文の特徴	残存部残存率	注記番号	備考
第 13 図 1	住居	縄文土器 深鉢	大木8a 式	口径 15.7 器高 20.1 底径 8.4	長石・雲母	にぶい褐色 (10YR4/3)	良好	単節RL充填後、二重沈線を横位に押引き。	口縁部～底部 1/2	1T一括	
第 13 図 2	住居	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	砂粒・赤色粒	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好	縦位ナデ。無文地。内面は斜位ナデ。	胴部	住D―3	
第 13 図 3	住居	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	砂粒	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	良好	内面横ナデ。外面、単節RL。縦横磨消帯で区画文を表出。	頸部	住―C	
第 13 図 4	住居	縄文土器 深鉢	―	―	長石・金雲母	橙色 (7.5YR6/6)	良好	無文地。内面斜位ナデ。外面縦ナデ。	底部	住ベルト	
第 13 図 5	住居	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	長石・白雲母・石英・輝石	明赤褐色 (5YR5/6)	良好	単節LR。縦位磨消帯。内面縦ナデ。	胴部	住D－1	
第 13 図 6	住居	縄文土器 深鉢	阿玉台式	―	長石・赤色粒	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好	角頭状工具による押引き。内面は丁寧なナデ。	口縁部	住上	
第 13 図 7	住居	縄文土器 深鉢	阿玉台式	―	長石・砂粒	明赤褐色 (5YR5/6)	良好	無文。横帯沈線による区画。隆帯貼付。内面は斜位の丁寧なナデ。	胴部	住上	
第 13 図 8	住居	縄文土器 深鉢	阿玉台式	―	砂粒・長石・赤色粒	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	良好	内外面ともに横ナデ。横帯爪形文による施文。	口縁部	住B	
第 13 図 9	住居	縄文土器 深鉢	阿玉台式	―	長石・赤色粒	黒褐色 (10YR3/2)	良好	隆帯貼付。内面は縦・横ナデ。	胴部	住上	
第 13 図 10	3号地下	縄文土器 深鉢	勝坂系	―	長石・砂粒	橙色 (10YR6/6)	良好	爪形文の隆帯を貼付。内面横ナデ。	口縁部	地3－3	
第 13 図 11	3号地下	縄文土器 深鉢	勝坂系	―	長石・雲母	明赤褐色 (10YR3/2)	良好	隆帯脇に一列の幅広角押文を押引き。内面横ナデ。	胴部	地3－6	
第 13 図 12	3号地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	長石・金雲母	明赤褐色 (5YR5/6)	良好	無文。横位の二重沈線。内面横ナデ。	口縁部	地3－5	
第 13 図 13	3号地下	縄文土器 深鉢	勝坂系	―	砂粒・長石・赤色粒	にぶい橙色 (10YR5/4)	良好	渦巻状隆帯脇に二条のペン先状工具押引き。内面は摩耗が著しく調整は不明。	口縁部	地3－2	
第 13 図 14	3号地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	長石	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好	単節LR。縦位渦巻沈線を垂下。	口縁部	地3－5	
第 13 図 15	3号地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	長石・雲母	にぶい黄橙色 (10YR5/3)	良好	単節RL。幅広磨消し文を構成。内面斜位縦位ナデ。	胴部	地3－3	

第13図 16	3号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	砂粒・長石・ 雲母	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	良好	無節L。縦位の沈線垂下。	胴部	地3－3	
第13図 17	3号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	砂粒・石英・ 赤色粒	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	良好	無節L。隆帯貼付。	口縁部	地3－2	
第13図 18	3号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	長石・雲母	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	良好	単節RL。口縁に微隆帯。内面横ナデ。	口縁部	地3－1	
第13図 19	3号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	砂粒・長石・ 雲母	にぶい黄褐色 (10YR4/2)	良好	無節L。磨消帯によって楕円区画を構成。内面横ナデ。	胴部	地3－3	
第13図 20	3号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	砂粒・石英・ 赤色粒	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	良好	無節L。磨消し文を構成。	胴部	地3－5	
第13図 21	3号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	長石・石英・ 赤色粒	灰黄褐色 (10YR5/4)	良好	無節L。横帯二重沈線を押引き。内面横ナデ。	胴部	地3－1	
第13図 22	3号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	長石・ 雲母	橙色 (7.5YR6/6)	良好	単節LR。内面横ナデ。	口縁部	地3－2	
第13図 23	1号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	長石・ 雲母	明黄褐色 (10YR7/6)	良好	無節R。蛇行沈線による区画文構成。内面縦ナデ。	胴部	地1－6	
第14図 24	2号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	口径 (22.5)	長石・ 砂粒	明黄褐色 (7.5YR5/6)	良好	単節RL。磨消帯による楕円区画文を構成。内面は横ナデ。	口縁部	地2－2	
第14図 25	5 トレ	縄文土器 深鉢	阿玉台式	口径 (23.1)	黒雲母・ 長石	橙色 (10YR3/1)	良好	無節L。重層の沈線押引き。内面横ナデ。	口縁部	5T－2	
第14図 26	1号 土坑	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	砂粒・ 長石	にぶい黄橙色 (10YR3/1)	良好	単節LRを充填。内面は横ナデ。	口縁部	土1－3	
第14図 27	2号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	長石・ 雲母	明黄褐色 (5YR3/4)	良好	無節R。蛇行沈線による区画文構成。	口縁部	地2－4	
第14図 28	2号 地下	縄文土器 深鉢	阿玉台式	―	黒雲母・ 長石	明赤褐色 (5YR3/4)	良好	縦位の条線。隆帯による三角区画文を構成。把手の部分を大きく円孔を造って、隆帯上は刻文を施文。	口縁部	地2－1	
第14図 29	2号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	砂粒・ 長石	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	良好	単節LR。沈線による文様帯区画。内面横ナデ。	口縁部	地2－4	
第14図 30	2号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	長石・ 金雲母	にぶい褐色 (7.5YR4/3)	良好	口縁部に単節RLを充填し、上半は単節LRを充填。内面横ナデ。	口縁部	地2－2	
第14図 31	2号 地下	縄文土器 浅鉢	阿玉台式	―	長石・ 金雲母	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	良好	内外面ともに無文。横ナデ。	口縁部	地2－3	
第14図 32	2号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	砂粒・ 長石	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	良好	単節RL横・斜位回転で施文。内面斜位のナデ。	口縁部	地2－7	
第14図 33	2号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	長石・ 砂粒	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	良好	縦位の沈(条)線。内面横ナデ。	胴部	地2－2	
第14図 34	2号 地下	縄文土器 深鉢	阿玉台式	―	長石・ 金雲母	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	良好	単節LR。隆帯脇に角押文の沈線押し引き。内面は縦・斜位のナデ。	胴部	地2－8	
第14図 35	2号 地下	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	砂粒・ 長石	にぶい黄橙色 (10YR5/4)	良好	単節RL。幅広磨消帯を構成。内面は縦ナデ。	胴部	地2－4	
第14図 36	3 トレ	縄文土器 浅鉢	加曽利E式	口径 (37.4)	長石・石英・ 砂粒・雲母	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好	口縁に横位の隆帯を貼付。沈線による押引き文によって楕円区画を構成。内面横ナデ。	口縁部	3T－2	
第14図 37	5 トレ	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	雲母・長石・ 砂粒	黒褐色 (7.5YR3/2)	良好	縦位条線を垂下。口縁に微隆帯を貼付し刻文を施文。内面横ナデ。	口縁部	5Tサブ	
第14図 38	5 トレ	縄文土器 深鉢	加曽利E式	―	長石・砂粒・ 雲母	橙色 (7.5YR6/6)	良好	口縁に渦巻隆帯を貼付。隆帯脇は一条の沈線押引き。	口縁部	5T北サブ	
第14図 39	5 トレ	縄文土器 浅鉢	阿玉台式	―	砂粒・長石・ 雲母	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	良好	内外面ともにナデ。無文。	口縁部	5T北サブ	
第15図 40	5 トレ	縄文土器 深鉢	加曽利E式	口径 (25.5)	砂粒・長石・ 石英	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好	隆帯による楕円区画文を構成。隆帯脇には一条の沈線を押引き。	口縁部	5T北サブ	
第15図 41	5 トレ	縄文土器 深鉢	阿玉台式	―	石英・長石・ 砂粒	橙色 (7.5YR6/6)	良好	単節LR、横・斜位回転。口縁に逆三角形隆帯貼付。内面横ナデ。	口縁部	5T－2	
第15図 42	3 トレ	縄文土器 深鉢	―	底径 7.9	砂粒・石英・ 長石・雲母	橙色 (7.5YR6/6)	良好	無文。内面外周にナデ付け。外面は胴下部を横ナデ。底部はナデ。	底部	3T－2	
第15図 43	5 トレ	縄文土器 深鉢	―	底径 9.0	砂粒・石英・ 長石・雲母	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	良好	無文。内面外周にナデ付け。外面は胴下部を横ナデ。底部はナデ。	底部	5T北サブ	

図版番号	出土位置	名称種別	石材	法量	特徴	残存部残存率	注記番号	備考
第 15 図 44	住居	石器 磨製石斧	安山岩	長さ [4.4]/ 幅 3.4/ 厚さ 1.5	表裏面研磨。基部端部一部欠失。刃部欠失。	基部 1/2	住 -C	
第 15 図 45	井戸	石器 磨製石斧	蛇紋岩	長さ 12.5/ 幅 5.8/ 厚さ 3.5/ 重量 450	表裏面研磨。基部端部一部磨滅か。	ほぼ完存	井 1	4層出土
第 15 図 46	2号地下	石器 磨製石斧	蛇紋岩	長さ 11.2/ 幅 5.3/ 厚さ 2.9/ 重量 240	表裏面研磨。表面の一部に剥離痕跡。刃部を敲打し、打製石斧として再利用する。	完存	地 2-4	
第 15 図 47	2号地下	石器 磨石	安山岩	長さ 5.4/ 幅 5.5/ 厚さ 4.4/ 重量 210	全面研磨して使い込む。特に三側面に主要な磨面認める。	完存	地 2-2	
第 15 図 48	3号地下	石器 石皿類	安山岩	長さ 14.0/ 幅 9.2/ 厚さ 4.7	表面に複数の使用痕の凹み。くぼみ石として使用。	側縁部の一部	地 3-7	5層出土
第 15 図 49	1号地下	石器 石皿類	安山岩	長さ：11.8/ 幅 9.8/ 厚さ 3.9	二側面に浅い凹面を作り出す。一部に使用痕のくぼみを認める。	破片	地 1-7	
第 16 図 50	3号地下	石製品 石棒	安山岩	長さ 20.9/ 径 15.0	側面研磨。両端部破損。側面 2 ヶ所に対向して穿孔あり。煤付着。穿孔および煤は後世の痕跡とみられる。	破片	地 -3	5層出土



第 17 図　出土遺物実測図 5（古代）

第 6 節　古代の遺物

第 17 図 1 は第 2 号地下式坑から出土した須恵器の短頸壺である。同一個体であると考えられる破片も第 1 号地下式坑から出土している。法量はすべて復元値になるが、最大径が 29.2cm、高台径が 14.4cm をはかる。器形の特徴としては、肩部が強く張り、最大径をはかる位置が比較的高い。また体部上半と内側底面に、灰白色の自然釉が付着している。内側の頸部根元付近と下部に比較的強いロクロナデの痕跡が認められる。胎土は緻密で、1mm 前後の白色粒と、さらに微細な黒色粒が少量認められる。これらの特徴から生産地は東海地方と推測され、年代については、器形の特徴から折戸 10 号窯跡～井ヶ谷 78 号窯跡段階と考えられる。

（及川）

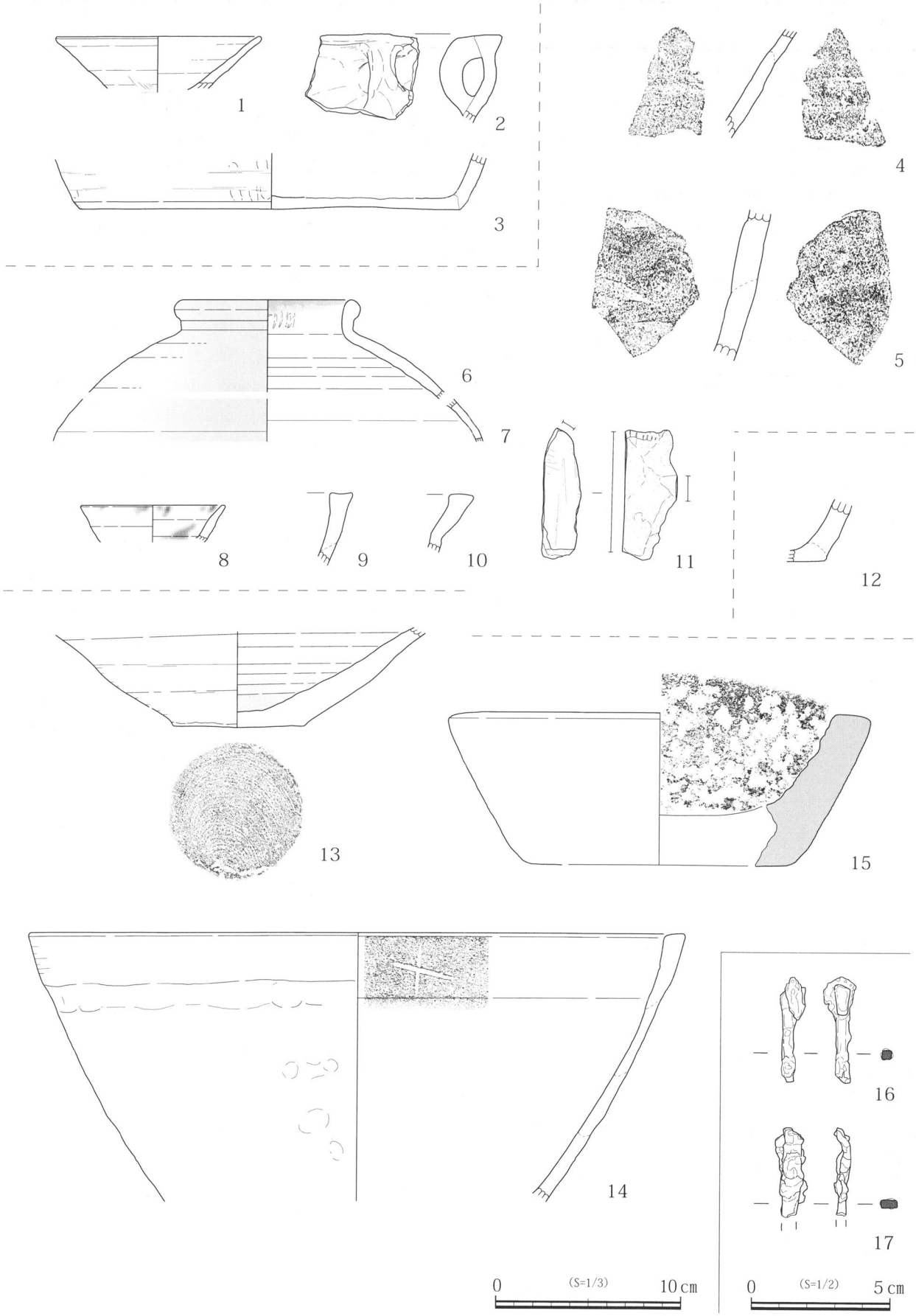
第 7 節　中世の遺物

中世の遺物は、在地産の土器類・国産の陶器類に加え、鉄製品・石製品が出土している。

第 18 図 1 ～ 3 は第 1 号地下式坑から出土した。1 は薄手・硬質の土師質土器小皿であり、焼成は良好ながら外面に霜降り状の剥離が確認される。外面下位には最終調整に伴うなで上げ痕跡が残る。

2・3 は土師質土器鍋の口縁部（内耳部遺存）と底部の破片であるが、同一個体か否かは判断がつかない。底部内面は器面剥離が著しい。3 の胎土には、金雲母が多量に含まれる。

第 18 図 4 ～ 11 および 16 は 2 号地下式坑から出土した。4 は常滑系陶器片口鉢 I 類の体部上位の破片とみられ、還元した胎土である。5 は常滑系陶器甕の胴部の小破片である。砂粒をやや多く含む胎土である。6 は古瀬戸系陶器の茶壷（祖母懐茶壷）の口縁部～肩部の破片である。口縁部は玉縁状に収め、短い頸部から撫で肩ぎみに胴部の広がりに移行する。外面及び口縁部内面には鉄釉を全面に施釉するが、部分的に釉薬の発泡が認められる。また、



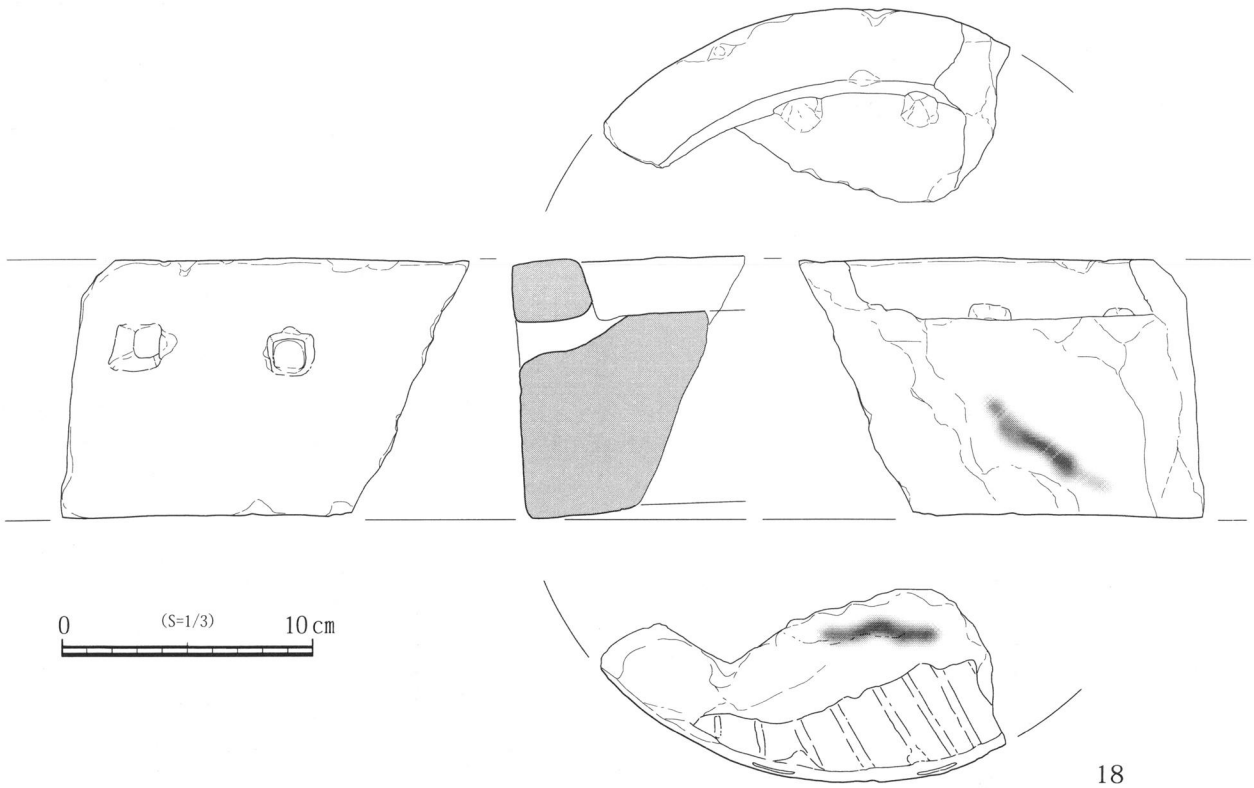
第18図　出土遺物実測図6（中世）

頸部以下の内面は全面、胎土と異なる黒色の色調を呈しており、釉薬のようなものを薄く塗っているように見える。7も古瀬戸系陶器茶壷の胴部小破片であり、6と同一個体の破片と考えられる。8は土師質土器小皿の口縁部～体部下位にかけての破片で、内外面にタールの付着が顕著である。体部上位で僅かに外反する器形を呈する。9・10はいずれも土師質土器鍋の口縁部小破片である。胎土には長石や花崗岩粒子が比較的多く含まれるものの、雲母は微粒子が少量含まれるに留まる。いずれも外面に煤の付着が認められる。11は砥石である。長軸方向に従って対向する二側面に使用面を認める他、端部破損面にも傷状の使用痕跡が5か所並んで認められる。16は棒状を呈する断面四角形の鉄製品であり、一方の端部は直角に屈曲している。鉄釘の可能性が高い。

第18図13～15及び第19図18は第3号地下式坑（5層）の出土品である。13は大型の土師質土器皿であり、底部から体部中位にかけて遺存する。底部外面は右回転糸切り離し痕を残し、底部内面は大きく窪ませる器形的特徴を有する。体部外面はロクロナデ痕を残すが、体部下位はヨコナデを最終調整とする。内面には薄く煤の付着が認められる。14は土師質土器鍋であり、胎土に花崗岩粒・雲母を多く含む。内面口縁部に十字状のヘラ刻みが認められる。15は黒色安山岩製の石鉢である。外面は研磨によって平滑に仕上げられており、特に体部上位（高さの3/2程）と口唇端部は丁寧に磨かれている。これに対して内面は工具によるツキ（突き）痕跡を顕著に残している。第19図18は粉挽き臼（上臼）破片である。側面から穿たれた二孔が上面の窪みに貫通する点が特異であるが、この小孔の壁面は平滑であり、破損を意図した二次穿孔とは考え難い。石材は角閃石や長石粒を含む安山岩である。なお、破損面に煤の付着が認められるが、第3号地下式坑5層からは被熱した破砕礫（大型の河原石であったとみられる。写真図版5参照）が出土しており、石棒の破片（第16図50）や花崗岩角礫にも煤の付着が認められた。

第18図12は、第1号住居跡確認面付近から出土した土師質土器鍋の底部破片。胎土に雲母を多く含み、外面には若干の煤が付着する。底部には外周に沿ったナデ調整が認められる。第18図17は第1号井戸跡出土鉄製品で断面は長方形を呈する。第1号井戸跡出土遺物は縄文時代のものが多く、帰属時期を示す遺物に恵まれなかった。

以上のように中世遺物は主に3基の地下式坑に伴う状況である。その所産時期は、第2号地下式坑出土の茶壷が古瀬戸後期様式以後のものとみられ、一方で土鍋の中に器高が浅いものや、器壁の立ち上がり角度が浅いものが認められない点を考慮すれば、大枠で15世紀後半代～16世紀代の範疇で捉えられよう。（村山）



第19図　出土遺物実測図7（中世）

表３：出土遺物観察表（古代・中世遺物）

本表の凡例：「法量」は容器類の場合、口径・器高・底径順の記載である。なお、（　）は推定値、［　］は現状での残存値を示す。単位はcmである。
「胎土」は土器・陶器類の胎土中混入鉱物を記載し、その量を（　）内に示した。その他の遺物の場合［　］内に材質を示した。
「色調」は土器・陶器類の胎土の色を記載した。表裏面等で色が異なる場合は、部位を示し別に色調記載をした。

挿図番号	出土遺構	名称 器種	法量 口径 器高 底径	胎土 ［材質］	色調	焼成	成形／整形／調整	残存率	注記番号	備考
第17図 1	第2号 地下式坑	須恵器 短頸壺	― [29 2] (14 4)	石英（少） 白色粒（少） 黒色粒（少） 赤色粒（極少）	黄灰色 (2 5Y5/1)	良好	ロクロ成形・付高台／内外面ロクロナデ・胴部下位4段以上のヨコケズリ。肩部及び底部内面に自然降灰。	口縁部を除く全体の1/3	地1-3/地2-3/地2-7/地2-9/地2-11 No 1,2,3	
第18図 1	第1号 地下式坑	土師質土器 小皿	(10 9) [2 9] ―	輝石（少） 白色粒（少）	黒褐色 (7 5Y2/1)	良好	ロクロ成形／内外面ロクロナデ／体部外面下位なで上げ痕。	口縁部の1/4	地1-3	
第18図 2	第1号 地下式坑	土師質土器 鍋	―	花崗岩（中） 長石，石英（多） 雲母（少）	明赤褐色 (5YR5/6)	良好	紐成形／内面ナデ、外面オサエ・ナデ。	口縁部破片	地1-3	外面煤付着
第18図 3	第1号 地下式坑	土師質土器 鍋	―	雲母，石英（多） 花崗岩（中）	明赤褐色 (5YR5/6)		紐成形／底部内面ナデ、一部器面剥離・底部外面板？圧痕後ナデ、周縁に沿ったナデ・胴部下位外面オサエ後ナデ。	底部完存	地1-2/地1-3/地1-6	内外面とも煤付着
第18図 4	第2号 地下式坑	陶器 片口鉢	―	砂粒（多） 白色粒（多）	灰黄色 (2 5Y6/2)	良好	ロクロ成形／内外面ロクロナデ。	体部破片	地2-3	常滑系
第18図 5	第2号 地下式坑	陶器 甕	―	砂粒（やや多）	暗灰黄色(2 5Y5/2) 表裏面）にぶい褐色 (7 5Y5/4)	良好	紐成形、内面に粘土継痕2ヶ所／内面ヨコナデ・外面斜位ヘラナデ。内面に自然釉若干付着。	胴部小破片	地2-1	常滑系
第18図 6	第2号 地下式坑	陶器 茶壷	(9 1) [5 3] ―		灰白色(2 5Y7/1) 表面釉）黒色 (N1 5/0) 裏面）黒褐色 (10YR3/1)	良好	ロクロ成形・外面鉄釉施釉／内面ロクロナデ痕顕著／頸部内面に数条の浅い縦位の条線（焼成前）。	口縁部～体部上位の破片	地2-10	古瀬戸系
第18図 7	第2号 地下式坑	陶器 茶壷	―			良好	ロクロ成形・外面鉄釉施釉／内面ロクロナデ痕顕著。	胴部細片	地2-4	古瀬戸系 6と同一個体
第18図 8	第2号 地下式坑	土師質土器 小皿	(7 6) [2 0] ―	白色粒（少） 雲母（極少） 赤色粒（極少）	黒色(7 5Y2/1) 表裏面）にぶい黄橙色(10YR7/4)	普通	ロクロ成形／内外面ロクロナデ。	口縁部～体部下位の1/6	地2-6	口縁部に煤付着
第18図 9	第2号 地下式坑	土師質土器 鍋	―	長石（多） 石英（少） 雲母（極少）	明赤褐色 (5YR5/6)	良好	紐成形／内外面ヨコナデ。	口縁部小破片	地2-1	外面に煤付着
第18図 10	第2号 地下式坑	土師質土器 鍋	―	花崗岩（中） 長石（少） 雲母（極少）	にぶい褐色 (7 5Y5/4)	良好	紐成形／内外面ヨコナデ。	口縁部小破片	地2-1	外面に煤付着
第18図 11	第2号 地下式坑	石製品 砥石	長[7 1] 幅2 9 厚[2 1]	［凝灰岩製］			（特徴）2側面に使用面、また、端部破損面にも使用痕あり。		地2-3	
第18図 12	第1号 住居跡 確認面	土師質土器 鍋	―	雲母（多） 長石（中） 石英（少）	にぶい褐色 (7 5YR5/4)	良好	紐成形／内面ヨコナデ、外面ユビオサエ後ナデ、底部外面周縁部に沿ったナデ。	底部小破片	住－上	
第18図 13	第3号 地下式坑	土師質土器 皿	― [5 2] 7 2	砂粒（やや多） 輝石（やや少） 赤色粒（少） 白色粒（少）	浅黄褐色 (10YR8/3)	やや不良	ロクロ成形／内外面ロクロナデ・底部右回転糸切り離し痕／体部外面下位ロクロナデ後のヨコナデ調整。	底部～体部破片・底部完存	地3-3	底部内に煤付着 5層出土
第18図 14	第3号 地下式坑	土師質土器 鍋	(35 2) [19 7] ―	花崗岩，石英，長石，雲母（いずれも多）	明赤褐色 (5YR5/6)	良好	紐成形／内面ナデ・外面口縁部強いヨコナデ、以下胴部外面ナデ後一部にユビオサエ／口縁部内面にヘラで十字の刻みを入れる。	口縁部～胴部下位の1/6	地3-3	5層出土
第18図 15	第3号 地下式坑	石製品 鉢	(27 0) 10 9 (18 3)	［安山岩製］			（特徴）外面研磨。特に体部上位と口唇面取り部は顕著なミガキで整形。内面に工具によるツキ痕を無調整で残す。	全体の1/5	―	5層出土
第18図 16	第2号 地下式坑	鉄製品 鉄釘カ	長[3 7] 幅0 4 厚0 3	［鉄製］			（特徴）断面正方形。端部屈曲。		地2-1	
第18図 17	第1号井戸跡	鉄製品 不詳	長[3 3] 幅0 6 厚0 4	［鉄製］			（特徴）断面長方形。端部屈曲。		井-2	
第19図 18	第3号 地下式坑	石製品 粉挽き臼 （上臼）	― 14 9 ―	［安山岩製］			（特徴）上面には深さ3cm程度の窪みを作出。側面から穿たれた二小孔がこの窪みに貫通。下面はやや抉り込み、擂り目を刻む。		―	破損部煤付着 5層出土

第Ⅳ章　考察

第１節　権現山遺跡における縄文時代概観

権現山遺跡の調査では試掘・確認調査（1 次）と本調査区を併せ一定量の縄文時代の遺物の出土がみられた。いずれも時期は縄文時代中期中葉から後葉で占められており、中期集落が展開しているものと推察できる。

試掘・確認調査区・本調査区ともに各地点による土器型式の傾向に差異はなく、いずれも縄文時代中期後半加曽利Ｅ式で主体を占めており、次いで阿玉台式，勝坂式，大木式が若干量の出土である。阿玉台式はほとんどが後半のⅣ式に比定されるもので、集落の開始が阿玉台式後半であり加曽利Ｅ３式、Ｅ４式、大木９ａ式という型式組成が集落の最盛時期と考えられる。

遺物の出土は住居跡から 10 点程度と当該期の遺構に伴う出土数が極めて少ない。１点はほぼ完形のもので大木８ａ式と思われるもの。このほかは地下式坑の埋没土からの出土であり縄文時代の遺構に伴ったものではなかった。地下式坑に出土をみる遺物の型式も同時期とみられ、集落としての利用はやはり後期までは下らないものと考えられる。調査対象域となった個所では、住居跡のほか、縄文時代の遺構として判断されるものがなく、第１～８号土坑までの土坑も縄文時代にみるフラスコ形を呈するものもなく、時期の判断に苦しむ。１次の試掘･確認調査区では、本調査範囲より縄文時代の遺物が多く出土しており、包含層とみられる遺物集中エリア、数基の土坑が確認されている。

縄文時代中期集落は時期によって大きく変遷を遂げるが、一般的にその構造は、かつて小林達雄が提唱したセトルメントパターンＡ（註１）のように中央に広場を持ち、貯蔵施設を持つ集会場的な場を有していたとするケースが考えられてきた。そして各地での集落の姿も同様に円を描いたかのごとく環状集落の姿を見せるのが中期後半にかけての集落のおおまかな姿である。そしておなじ場所に何世代にもわたる定住によって、数百にもなる遺構群の最終的な姿となる。

本調査区における集落の展開を考察するにはいまだ十分な資料に乏しいが、遺物の出土量から察するに中期集落の中心域が調査区周辺にあたる可能性は強い。試掘・確認調査（1 次）の遺物包含層と想定される範囲や土坑群の拡がりなど、地形的な面などからも判断して集落の中心域を示すものであったとも考えられる。

集落の時期を示す資料に加曽利Ｅ式を中心としながらも、勝坂系や、大木式の遺物が多く混じる事実も興味深い。異系統土器の混入などから様々な地域間交流なども考えられるが、鬼怒川水系でのいくつかの地点で異系統型式の出土が報告されている。本遺跡に程近い下妻市桜塚古墳群の調査（註２）でも大木９式の一定量の出土が報告されており、縄文中期の遠隔地域の文化の拡がりが指摘されている。今回の調査においても報告された、第 13 図１の深鉢は大木８ａ式に比定されるものであり、第 14 図 24 も加曽利Ｅ４式と大木９式の影響が強くみられる。これら周辺での在地系と異系統土器の出土の分布と鬼怒川水系などとの関わりなど、周辺の縄文時代を考えるうえで重要な課題を提示する報告といえる。

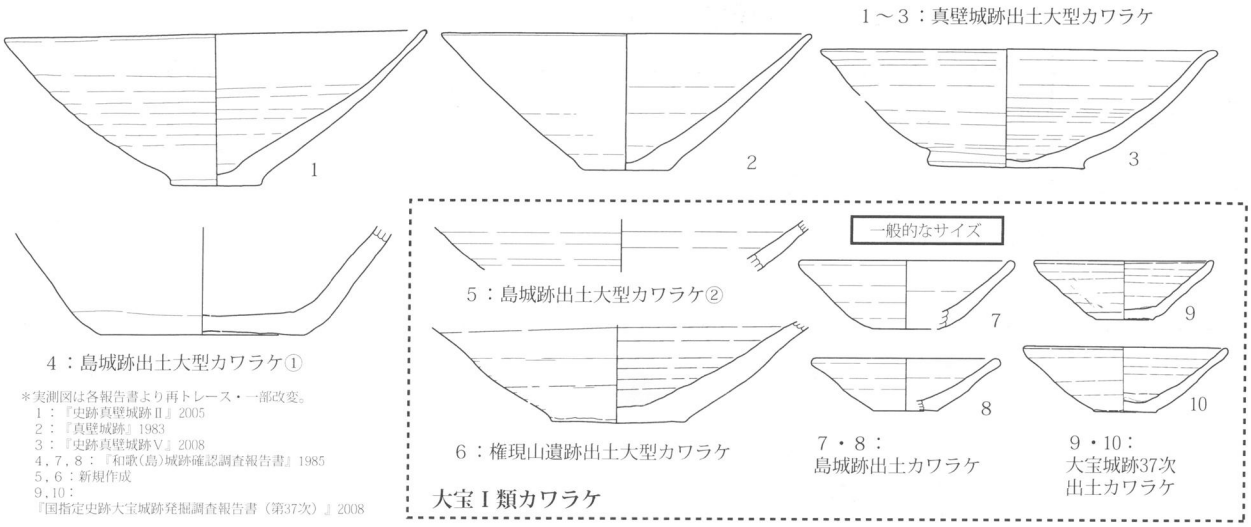
（新垣）

（註１）　小林達雄「縄文時代の集落」『国史学』110・111 合併号　1980
（註２）　下妻市教育委員会『桜塚古墳群』2008

第２節　中世の出土遺物　～土師質土器皿と石臼について～

本調査地点では地下式坑３基や井戸跡１基が検出された。このうち地下式坑は縦坑部を南に向けて列を為すように検出されており、周辺域に群在することが推定される。残念なことに中世遺物の多くが天井部崩落後の廃棄物としての検出であり、地下式坑の使用時期を直接的に示すものでは無いが、近世遺物の混入が確認されない点からみて地下式坑廃絶から遺物投棄までの時間差は比較的短いものと考えたい。地下式坑の群在状況から周辺に屋敷跡などの施設が存在する可能性も高く、検出遺物もこれらの周辺施設と関わりを持っているものであろう。

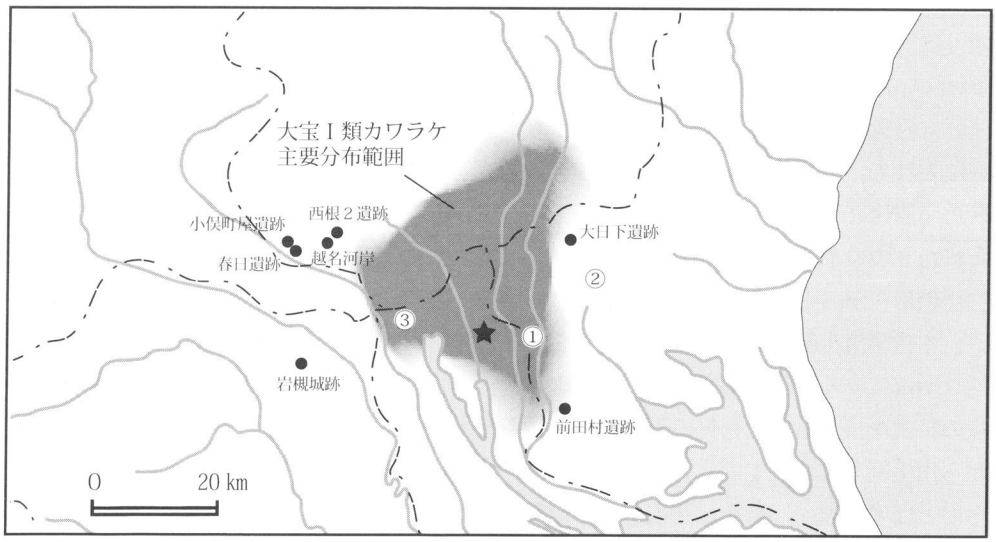
出土遺物において注目されるのは第３号地下式坑出土の土師質土器皿（以下、カワラケと称する）に大型のものが認められる点である。大型のカワラケは桜川市真壁城跡においてはかなりの量が出土しており、15 世紀後半か



＊実測図は各報告書より再トレース・一部改変。
1：『史跡真壁城跡Ⅱ』2005
2：『真壁城跡』1983
3：『史跡真壁城跡Ⅴ』2008
4，7，8：『和歌(島)城跡確認調査報告書』1985
5，6：新規作成
9，10：
『国指定史跡大宝城跡発掘調査報告書（第37次）』2008

権現山遺跡出土カワラケとその類例

0 (S=1/4) 10cm



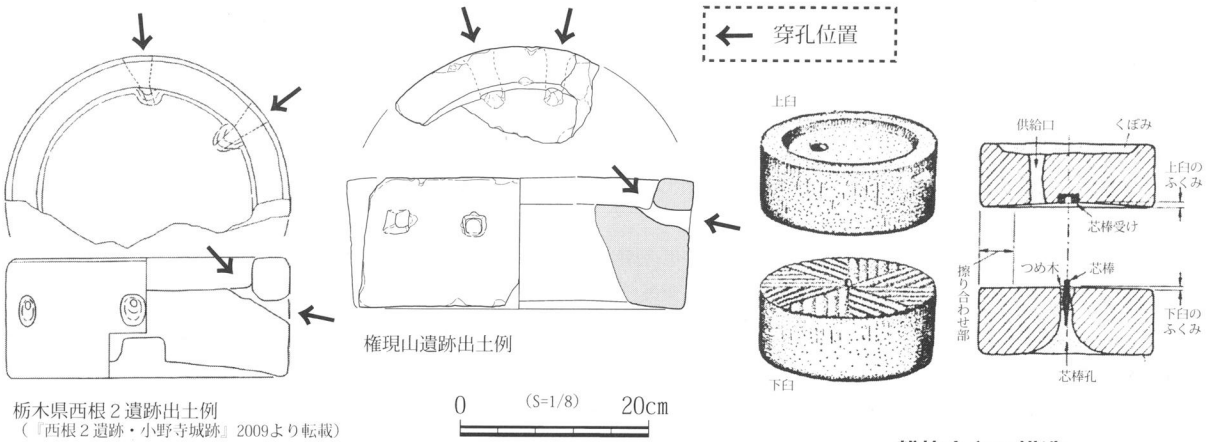
★ 八千代町権現山遺跡
八千代町島城跡

● 権現山遺跡石臼の
類例出土遺跡

①下妻市大宝城跡

②桜川市真壁城跡

③古河市古河城跡



栃木県西根２遺跡出土例
（『西根２遺跡・小野寺城跡』2009より転載）

権現山遺跡出土石臼とその類例

粉挽き臼の構造
（三輪茂雄『臼』1978より転載）

第 20 図　権現山遺跡出土カワラケ・石臼の関連資料

ら 16 世紀いっぱい存在するとされている（註１）が、他の遺跡においてはごく少なく、1 個体程度の検出であることが普通である。八千代町においても、権現山遺跡の南に所在する和歌島城跡において大型カワラケ (第 20 図４）が出土しているが、その胎土は赤褐色を呈し砂粒の混入が多いばかりでなく、全体に煤が付着するなど、むしろ内耳土器と共通する特徴を有し、大きく様相が異なる（註２）。ところが、島城跡に於いてはもう 1 点大型かわらけの破片の出土が認められる。第 20 図 5 に示したカワラケの体部小破片がそれであり、部位、厚味、円弧のカーブからかなり大形のカワラケであることが確実である。また、胎土の色調・混入物も権現山遺跡出土の大型カワラケに極めて近い特徴を示す。

大型カワラケの破片が出土した島城跡Ａ区堀跡からは、一般的なサイズの坏形カワラケ（口径 10 ㎝前後）も数多く出土している。それらのカワラケは、下妻市大宝城跡（37 次調査区地下式坑）の出土資料と同様の特徴を持つものであった。即ち、色調が白色味を帯び、胎土に輝石・角閃石類を多量に含む点や、内底面を横ナデする点が特徴となる一群であり、大宝城報告書分類の「大宝Ｉ類」に該当する（註３）。「大宝Ｉ類」のカワラケは栃木県南部から茨城県西部に分布が確認され、時期的には 15 世紀後半～ 16 世紀中葉頃に主体があるようである。権現山遺跡出土の大型カワラケとこれらの一般的なサイズのカワラケの特徴（色調・胎土・器形・底部内面の調整）はよく一致しており、「大宝Ｉ類」の組成に権現山遺跡・島城跡出土例のような大型種が含まれていることを示している。

戦国期においては、多法量のカワラケが饗宴の場で用いられたことが知られているが、本例のような大型カワラケの出土は、当地域にあっても多法量のカワラケを用いる儀礼的饗宴が行われていた事を示しているように思われる。権現山遺跡から大型カワラケが出土した事実は、特殊なサイズのカワラケを必要とした人物の存在を示唆するものであり、遺跡周辺にかなり高い階層の人物が居住していたことを暗示するものと考えられる。なお、「大宝Ｉ類」カワラケの分布は、古河公方の勢力範囲と関わりがありそうである（註４）。今後は、同種のカワラケを多数出土した島城跡との関連も視野に入れて、当遺跡の性格を検討すべきである。

今一つ、注目しておきたい遺物として、第３号地下式坑出土の石臼がある。この石臼は粉挽き臼の上臼であるが、不自然な事に側面に穿たれた２つの小孔が上面の窪みに貫通している。本来、粉挽き臼の上面の窪みには原料を入れ、それが窪み底面に穿たれた供給孔から上臼と下臼の隙間に落ちていき、上臼を回転させることでこの原料を粉末化する構造となっているが、本遺跡出土例では、側面の小孔から、窪みの中に入れた原料がこぼれ落ちてしまうことになる。この小孔の役割を明確にすることは出来ないが、縄などをくくり付けることで小孔を塞いで使用するものなのかもしれない。同様の特徴を持つ石臼は管見の限り茨城県から栃木県周辺の遺跡で出土例が確認され、神奈川県や埼玉県にも少数ながら出土例を確認している。ただし、その数は石臼出土量総体の中にあっては極めて少なく、一般的に普及していたものとは考え難い。分布は利根川の中流域に集中するようであり、特に栃木県足利市・佐野市付近に多く認められる。現状では、用途、分布の意味ともに不明とせざるを得ないが、中世における粉食文化と密接に関わる問題を内包している可能性もあり、今後、同種資料の出土に注意すべきであろう。

（村山）

（註１）宇留野主税「中世城館研究の課題」『婆良岐考古』第 23 号　2010 ほか

（註２）山野井哲夫氏の御厚意により遺物を実見、一部実測させて頂いた。八千代町教育委員会『和歌 (島) 城跡確認調査報告書』1985

（註３）下妻市教育委員会『国指定史跡大宝城跡発掘調査報告書（第 37 次調査）』2008　なお、宇留野氏はこのタイプを「県西坏Ａ」として、より巨視的視点から編年作業を行っている。

宇留野主税・新垣清貴「茨城県西・鹿行地方における中世後期のかわらけ編年」『茨城中世考古学の最前線』2011

（註４）田中信「土器から見る関東の戦国時代と河越」『後北条氏と河越城』川越市立博物館第 30 回企画展図録　2007 ほか

＊主な引用・参考文献（第 20 図の分布図作成に用いた報告書は割愛した）

・栃木県埋蔵文化財調査報告書第 320 集『西根２遺跡・小野寺城跡』栃木県教育委員会・㈶とちぎ生涯学習文化財団　2009

・真壁町教育委員会『真壁城跡～中世真壁の生活をさぐる～』1983

・真壁町教育委員会『史跡真壁城跡Ⅱ』2005

・桜川市教育委員会『史跡真壁城跡Ⅴ』2008

・三輪茂雄『臼』ものと人間の文化史 25　1978　法政大学出版局

第Ⅴ章　総括

今回の権現山遺跡の調査で検出した主な遺構は、縄文時代の竪穴住居跡１軒と中世の井戸跡１基及び地下式坑３基であるが、縄文時代の竪穴住居跡及び中世の地下式坑は、八千代町では初めての調査事例である。そこでここでは八千代町周辺の地域、県西地方で調査された主な事例を紹介し、権現山遺跡の調査の意義について考え総括としたい。

縄文時代の竪穴住居跡

権現山遺跡は、第Ⅱ章第２節でも述べたように、町内でも屈指の縄文時代の集落遺跡であり、広範囲の遺跡内で時期によって中心となる分布域を異にしているが、今回の調査では遺跡の東南部の一部から竪穴住居跡１軒を検出したのみで、縄文時代の集落の様相を明らかにできるものではない。今後の調査による資料の蓄積を待って考察すべき課題である。

周辺地域の主な縄文時代遺跡の調査事例としては、次の遺跡があげられよう。五霞町の冬木貝塚、旧石下町の鴻野山貝塚、旧三和町の北下山遺跡、結城市の小田林遺跡、鹿窪坂の上遺跡、峯崎遺跡、旧水海道市の大生郷遺跡、旧岩井市の高崎貝塚、旧総和町の釈迦才仏遺跡、下妻市桜塚古墳群の縄文時代集落などがある。

これらの遺跡のうち、大生郷遺跡では前期から中期にかけて 11 軒、高崎貝塚（註１）では早期から後期にかけて 41 軒、釈迦才仏遺跡（註２）では中期から後期・晩期にかけて 32 軒、桜塚古墳群（註３）では中期後半の竪穴住居跡が 14 軒発見されており、縄文時代集落の様相を知ることができる遺跡である。また出土遺物では、第Ⅳ章第１節でも指摘されているように、権現山遺跡や桜塚古墳群の縄文時代集落からは大木系の影響が見られる土器が出土しており、鬼怒川・小貝川流域の地域において東北地方との文化的な交流を示す貴重な資料である。

（註１）(財) 茨城県教育財団『茨城県教育財団文化財調査報告書第 88 集　高崎貝塚』1994
（註２）(財) 茨城県教育財団『茨城県教育財団文化財調査報告書第 131 集　大橋Ｂ遺跡・釈迦才仏遺跡』1998
（註３）下妻市教育委員会『桜塚古墳群』2008

中世の地下式坑

権現山遺跡で調査した地下式坑は３基であるが、調査には至らなかったが一次の試掘・確認調査で確認した黒色の覆土を持つ大形の円形の土坑も地下式坑の可能性が強いことから、調査区周辺には少なくとも５基以上の地下式坑が存在することが想定される。調査した３基の地下式坑の形状は、方形が２基、横長方形が１基で、いずれも南壁中央部に竪坑を持つものである。地下室の高さは壁際で 0.9 m～ 1.0 m、中央部の現存高は約 1.2 mであるが、壁際から天井部へつながる状況から考えると、地下室中央部では約 1.5 m前後の高さがあったと推定される。地下式坑の性格については、１号地下式坑の底面に大形の焼土ブロックが点在していたが、３基とも出土遺物も少なく、直接性格を推定できるような状況は認められなかった。

地下式坑は、全国で 1,000 を超す遺跡から 5,500 基以上発見されているが、その８割以上が関東地方に集中し、千葉県だけで 2,000 基を超えている。茨城県では、70 数か所の遺跡から 200 基以上の地下式坑が調査報告されているが、岩瀬から水戸周辺にかけての県中央部、北浦周辺の地域、筑波山周辺から利根川流域にかけての県南地域に大きな分布が認められるようである。

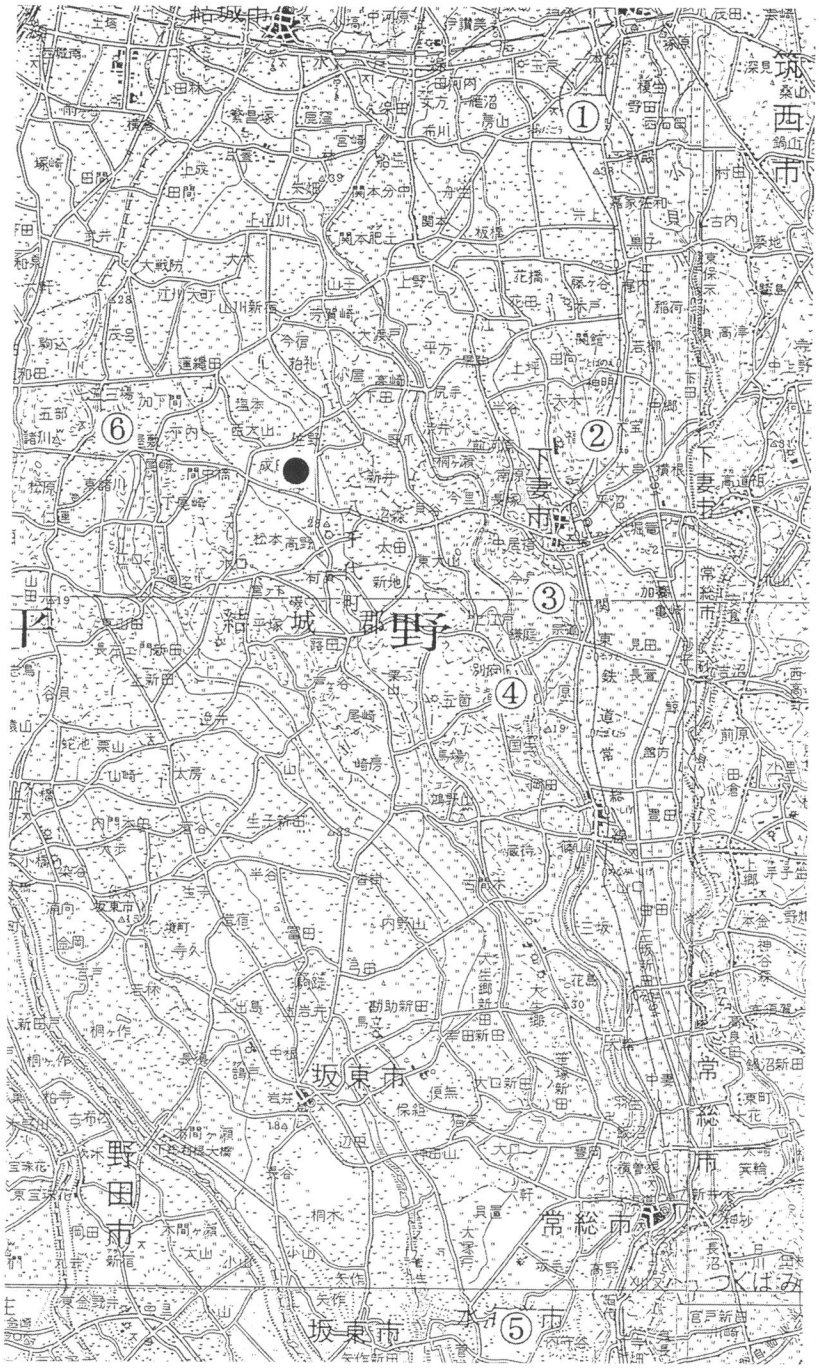
県西地方では、10 遺跡ほどで約 90 基の地下式坑が調査されている。桜川市（旧岩瀬町）の桜川上流域にあたる岩瀬盆地では、辰街道遺跡で１基、当向遺跡で８基、金谷遺跡で 28 基、犬田神社前遺跡で 20 基、桜川中流域にあたる筑西市（旧明野町）の 中根十三塚遺跡で１基の地下式坑が調査されている。小貝川流域では、筑西市（旧下館市）の 野殿深作遺跡で９基、下妻市の大宝城跡で４基調査されている。権現山遺跡の立地する鬼怒川流域では、下妻市（旧千代川村）の 下栗野方南遺跡から１基、皆葉遺跡から２基、常総市（旧水海道市）の 菅生城址から２基、鬼怒川以西では、西仁連川流域にあたる古河市（旧三和町）の 本田遺跡で７基から 11 基の地下式坑が検出されている。

地下式坑からの出土遺物は少なく、中には皆無のものもある。出土した遺物は、小皿、内耳鍋、土鍋などの土師質の土器片や、常滑、古瀬戸などの陶器片、石臼などが出土しており、15 世紀後半から 16 世紀にかけての年代が

与えられている。調査された遺跡の中には、地下式坑を墓坑として想定しているものもあるが、現在のところ確実に埋葬施設として判断できるものは少ないように思われる。同時期の遺構や出土遺物、その地域の歴史的な背景を含めて検討することが必要であろう。

鬼怒川流域の地域では、城館跡も含めて分布調査によって200か所以上の中世の遺跡が確認されているが、まだ調査事例が少なく今後の資料の増加が望まれる。権現山遺跡の調査は一部ではあったが、県西地域において新たな資料を提供できたことに意義があると考える。

（山野井）



	遺　跡　名	検出数
●	権現山遺跡	3基
①	野殿深作遺跡	9基
②	大宝城跡	4基
③	下栗野方南遺跡	1基
④	皆葉遺跡	2基
⑤	菅生城址	2基
⑥	本田遺跡	7基

第21図　鬼怒川・小貝川流域の地下式坑調査遺跡分布図（1/200,000）

＊主な参考文献

・茨城県教育財団文化財調査報告書

第91集『野殿深作遺跡』1994、 第154集『中根十三塚遺跡』1999、 第222集『辰街道遺跡1』2004

第224集『当向遺跡』2005、 第225集『金谷遺跡1』2005、 第254集『金谷遺跡2』2006

第229集『犬田神社前遺跡1』2004、 第248集『犬田神社前遺跡2』2005

・千代川村教育委員会『下栗野方南遺跡発掘調査報告書』1996、『皆葉遺跡発掘調査報告書』2003

・下妻市教育委員会『国指定史跡大宝城跡発掘調査報告書(第37次調査)』2008

・常総市教育委員会『菅生城址』2007　　・古河市教育委員会『本田遺跡』2010

・房総中近世考古学研究会・東国中世考古学研究会『全国地下式坑集成資料』2007

・東国中世考古学研究会『中世の地下室』2009

報　告　書　抄　録

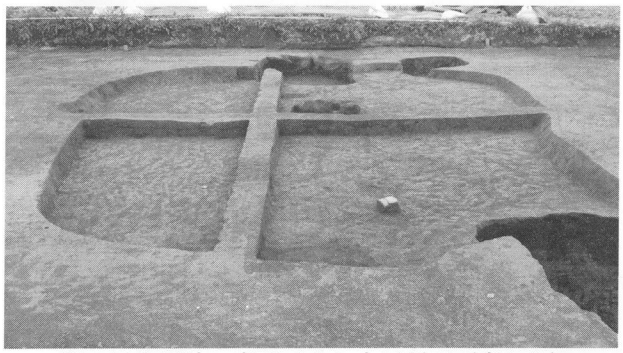
ふりがな	ごんげんやまいせき
書　　名	権現山遺跡
副　書　名	集合住宅建設に伴う遺跡の発掘調査
シリーズ名	八千代町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	１４
編集著者名	村山　卓　新垣清貴　及川謙作　山野井哲夫
発行機関	八千代町教育委員会
所　在　地	〒300-3572　茨城県結城郡八千代町大字菅谷1170　ＴＥＬ 0296-48-0525
発行年月日	西暦２０１１年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	 遺跡番号	北　緯 °′″	東　経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
権現山遺跡（こんげんやまいせき）	茨城県結城郡（いばらきけんゆうきぐん） 八千代町大字（やちよまちおおあざ） 菅谷（すがや）	08521	114	36° 11′ 37″	139° 53′ 24″	20090217 ～ 20090323	203	集合住宅建設

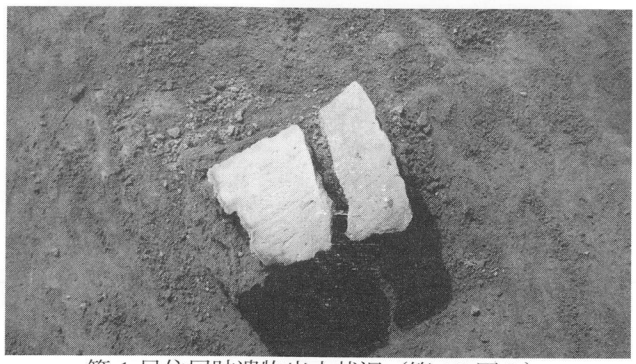
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
権現山遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居跡１軒	縄文土器 磨製石斧、磨石外	縄文時代の竪穴住居跡は町内初の調査事例
		奈良・平安時代		須恵器短頸壺	
		中　世	地下式坑３基 井戸跡１基	土師質土器小皿、鍋、内耳鍋 陶器、石鉢、石臼外	中世の地下式坑は町内初の調査事例

要　　約	
	権現山遺跡は、旧石器時代から縄文時代、奈良・平安時代にかけての集落遺跡で、特に縄文時代が中心の遺跡とされていたが、今回の調査で中世まで下ることが確認された。 縄文時代の遺構では、今回の発掘調査で、町内で初めての縄文時代の竪穴住居跡を検出し、また縄文時代中期の深鉢形土器の良好な資料を得ることができた。 中世の遺構では、井戸跡１基及び地下式坑３基を調査したが、地下式坑は町内で初めての調査事例である。県西地方でも地下式坑の調査は１０遺跡ほど報告されているが、あまり例は多くないと言える。今回の調査で新たな資料を追加することができた。

調査区全景（南から）



第 1 号住居跡・東西ベルト土層断面（南から）

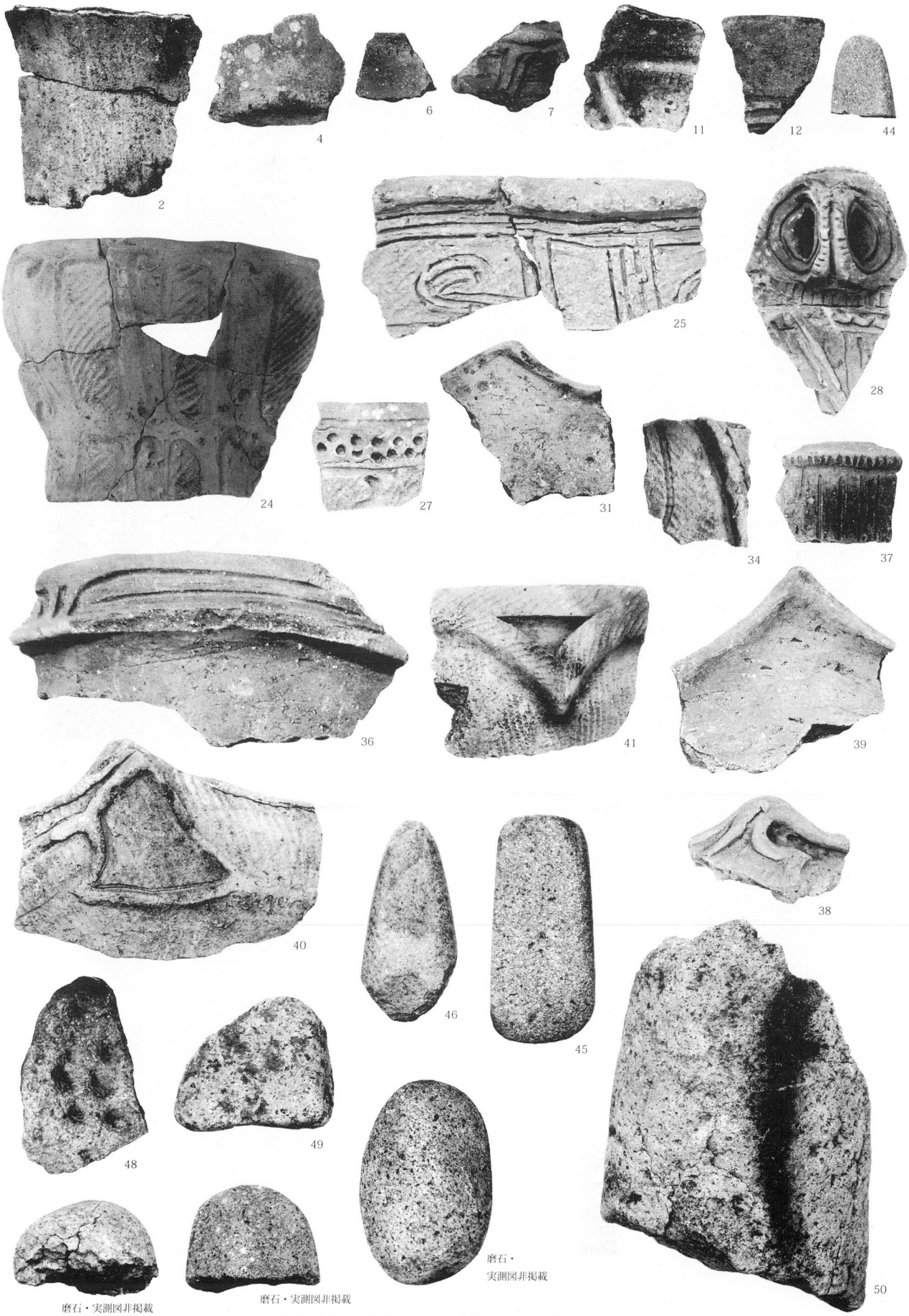


第 1 号住居跡遺物出土状況（第 13 図 2）

第 1 号住居跡・南北ベルト土層断面（東から）

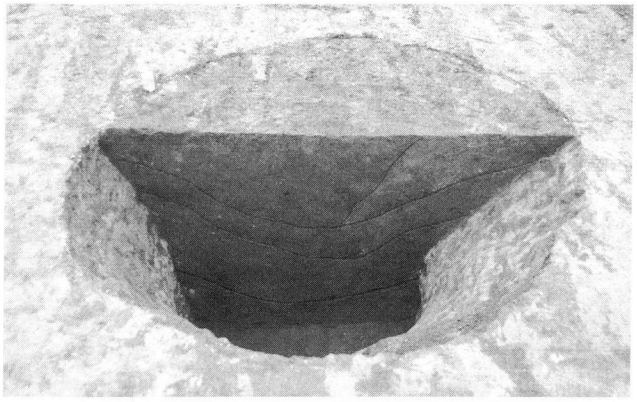
第 1 号住居跡完堀状況（南から）

第 1 号住居跡出土縄文土器（第 13 図 1）

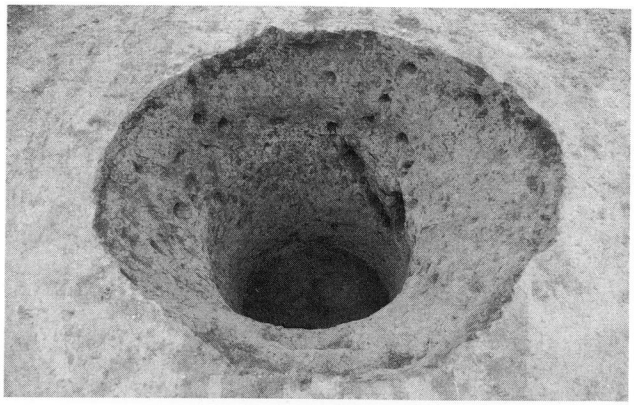


縄文時代の土器・石器（第 13 図～第 16 図）

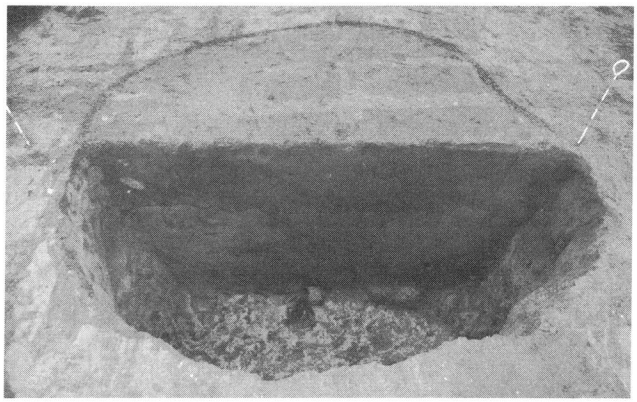
（S=1/3 で構成。ただし 48・49 は S=1/4、50 は縮率任意。）



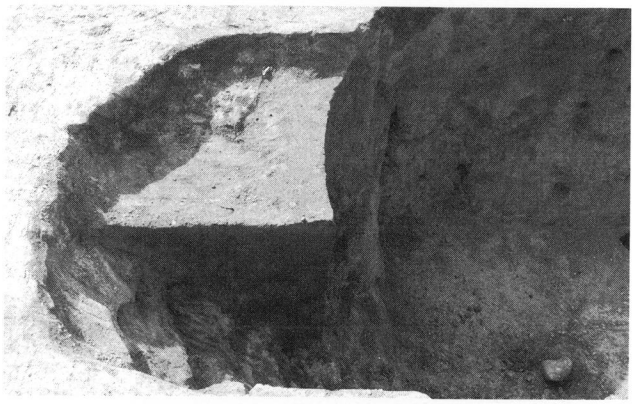
第１号井戸跡土層断面（南から）



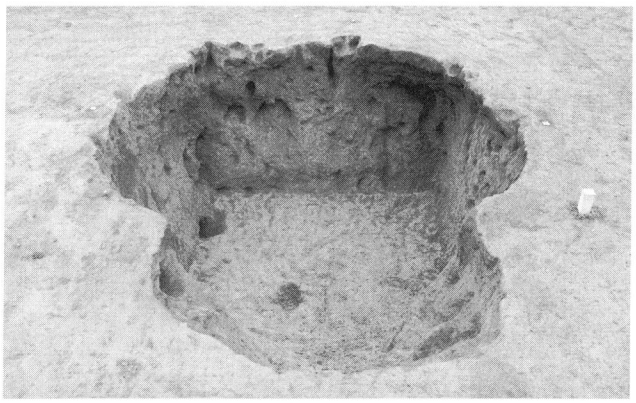
第１号井戸跡完堀状況（南から）



第１号地下式坑土層断面（南から）

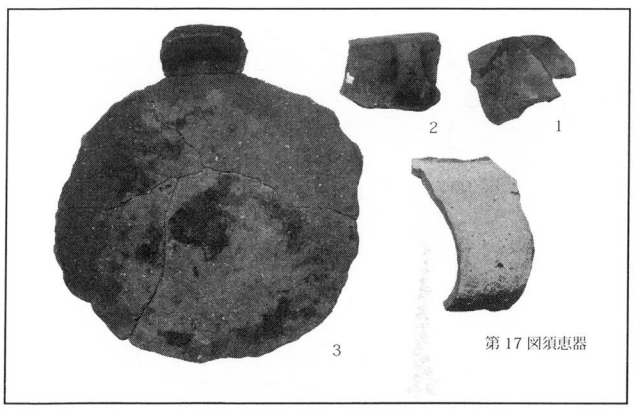


第１号地下式坑竪坑部分土層断面（東から）



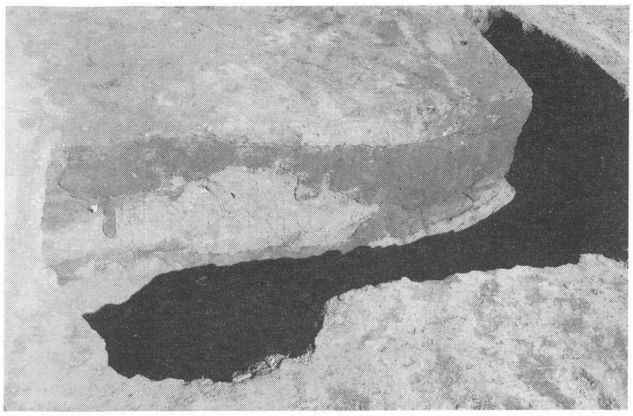
第１号地下式坑完堀状況（南から）

第１号地下式坑完堀状況（西から）



第１号地下式坑出土遺物（第17図、第18図１～３）

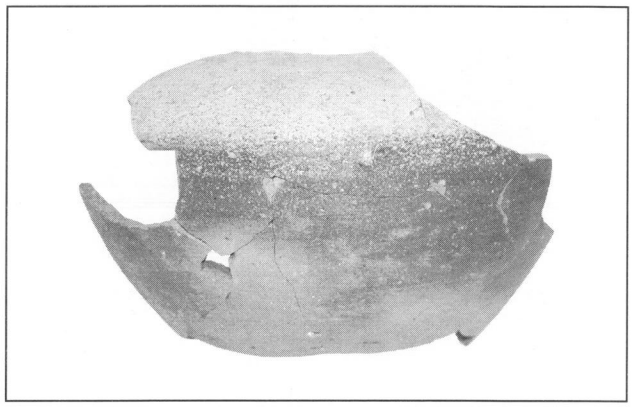
第２号地下式坑竪坑部分遺物出土状況（北西から）



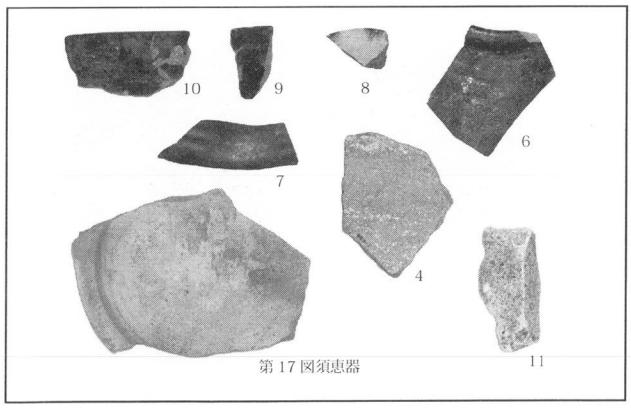
第２号地下式坑土層断面（南から）

第２号地下式坑完掘状況（南から）

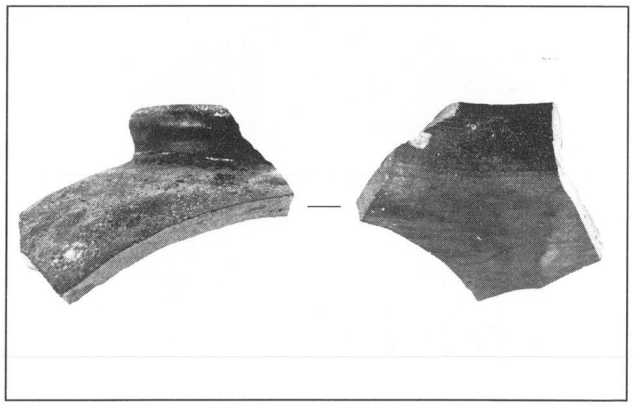
第２号地下式坑完掘状況（北西から）



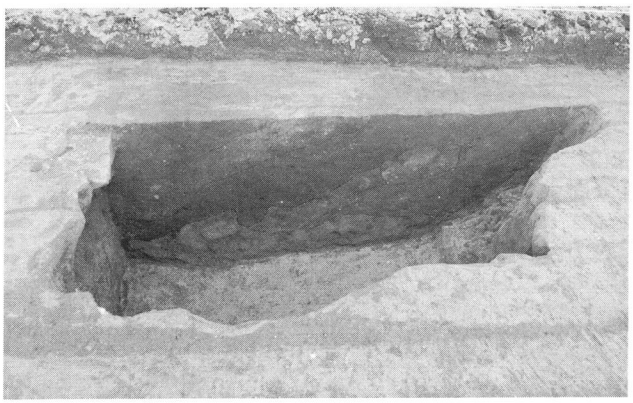
第２号地下式坑出土遺物（第 17 図）



第２号地下式坑出土遺物（第 17 図・第 18 図４～11）



第２号地下式坑出土遺物（第 18 図６）

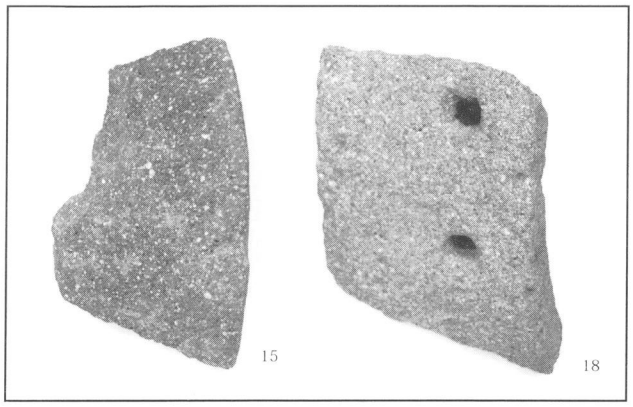


第３号地下式坑土層断面（西から）

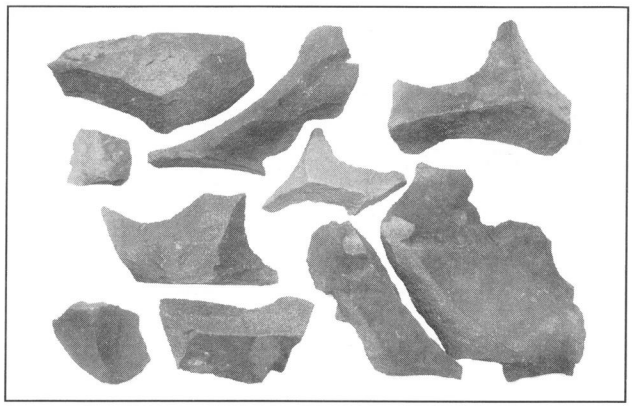
第３号地下式坑遺物・礫出土状況（南から）

第３号地下式坑完掘状況（南から）

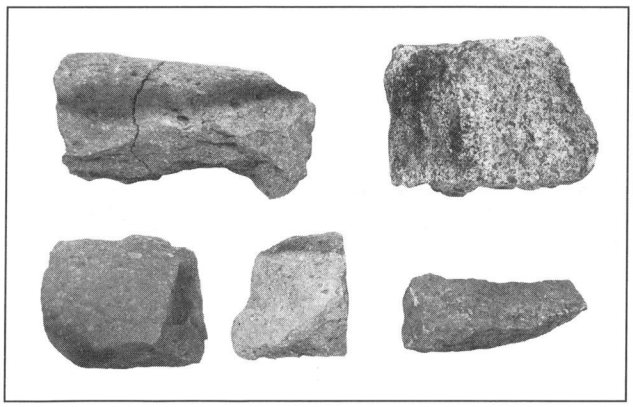
第３号地下式坑完掘状況（北西から）



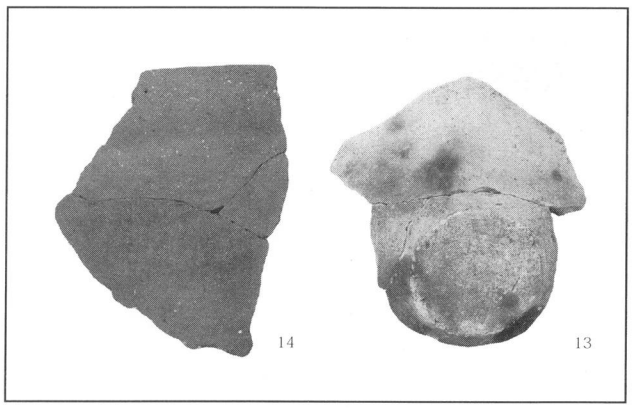
第３号地下式坑出土遺物（第 18・19 図）



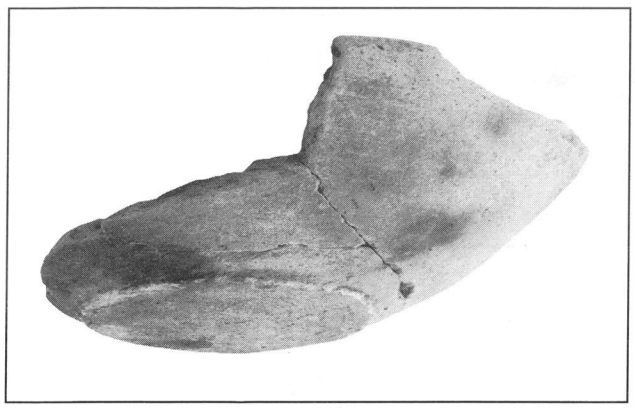
第３号地下式坑出土被熱礫



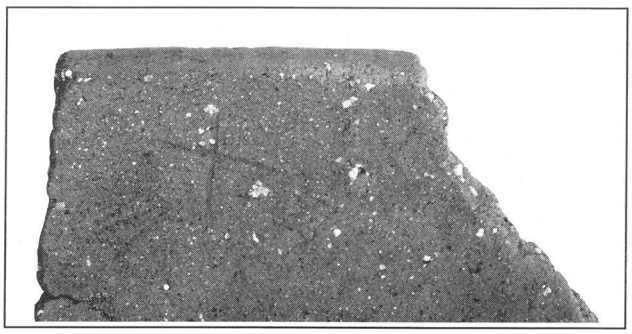
第３号地下式坑出土遺物（礫類）



第３号地下式坑出土遺物（第 18 図）



第３号地下式坑出土遺物（第 18 図 13）



第３号地下式坑出土土鍋ヘラ刻み（第 18 図 14）

八千代町埋蔵文化財調査報告書 14

茨城県結城郡八千代町大字菅谷

権 現 山 遺 跡

－集合住宅建設に伴う遺跡の発掘調査－

平成 23 年 3 月 31 日　発行

八千代町教育委員会